

令和5年度(2023年度)文部科学省委託事業

学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業

「大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築」

「カレッジ長大」成果報告書

障害者版 STEAM 教育のプログラム開発を目指して
—自由になるための方法(リベラルアーツの「A」)を意識しながら—

2024年2月

長野大学

令和5年度「カレッジ長大」教育プログラム開発事業

障害者版 STEAM 教育のプログラム開発を目指して

—自由になるための方法(リベラルアーツの「A」)を意識しながら—

目次

1. はじめに～巻頭言として～	1
2. カレッジ長大の概要	2
3. 準備・事前研修	
(1) 準備編	4
(2) 事前研修編	5
4. プログラム実施状況	
(1) 第1回～第7回	8
(2) 第8回 成果報告「私」編	17
5. 学内外での連携推進等	
(1) カレッジ長大事業推進担当者会議	26
(2) 連携協議会	28
(3) 広報(大学 HP)	30
(4) Press Release、新聞記事	35
6. 学生スタッフの座談会	37
7. 受講者の家族、事業所ソーシャルワーカーの声	42
8. 本事業実施にかかるアンケート集計結果	46
9. 編集後記	59

1. はじめに ～巻頭言として～

2024.01.14

長野大学 学長 小林 淳一

日本国憲法第14条では、「すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」と謳われている。当たり前のことである。しかし現実的には様々な課題が潜んでいる。障害者においても然りである。

世の中は、健常者を前提に多くの社会システムが作られ、そこから外れる人たちには、ほとんど目を配ってこなかった。むしろ例外として扱う立場が長く続いてきた。しかしながら、20世紀後半からはその考え方が変わってきた。憲法の本質に基づく考え方に立った場合、私たちは実際の社会をどう見直していかなければならないか、その視点であらゆる分野で検討することが盛んになってきた。これは世界的な動きでもある。

長野大学には社会福祉学部があり、上述の観点から障害者支援の在り方を教育研究の中で問い続けている。「2023年度カレッジ長大・成果報告書」は、文部科学省の令和5年度「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」の委託事業に採択され、令和5年10月から2か月半実施し、その成果をまとめたものである。

知的障害者を対象とし、大学で学ぶ経験を通し、社会に一步踏み出す勇気と自信を感じてもらうことが目的である。受講者には、一人一人、本学の学生がサポーターとして付き、また、事業を推進するスタッフとしてさらに何人かを配置した。

学生はすべて自ら志願している。学生たちの活躍は素晴らしく、12月の最終回で行われた受講生の成果発表会では、受講生をやさしくサポートし受講生の誇らしげな笑顔を引き出していた。会場は暖かな笑い声が絶えることがなく、大勢参加されたご家族の皆さんも本当に楽しそうだった。もちろん受講者教育支援がメインであるが、この事業を通し学生が大きく成長する結果となった。

以上

3. カレッジ長大の概要

「カレッジ長大」前史

相模原市・相模女子大学の文部科学省委託事業「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」にかかる成果発表会が2023年2月に開催され、本学教員の宮本はそこに参加した。同事業の概要は文科省HP等についてある程度知ることはできていたが、実際、それを本学でできるのかどうかについて、確信が持てないでいた。1年間の実践研究事業の集大成として成果発表会をイメージできるかがエントリーへの大きな判断材料になるだろうと考えた。前述の発表会に参加した率直な印象として、障害当事者の発表を前にして、その実現は極めて厳しいかもしれないという思いを抱きながらも、思い切って同事業に挑戦してみようという結論に至った。

本学社会福祉学部は、社会福祉コース・発達支援コース・福祉心理コースの3コースを設け、対人援助職(社会福祉士、特別支援学校教員など)の養成を行っている。本学学部の性格と文科省同事業との関係を考えてとき、極めて“親和性”は高いと思われる。このことを踏まえ、体制作りとして、実務的に同事業を進めるための教員と事務方との協働、学外から様々な意味での応援団(⇒連携協議会)の形成を行なう中で、文科省同事業へのエントリーへと発展していった。

2023年度「カレッジ長大」プログラムと参加条件

●プログラムの概要

No.	日程	内容
1	10/1(日) 10-15時	社会福祉(クラシ) ◆自分や環境を知る
2	10/14(土) 11-13時	学園祭参加
3	10/28(土) 10-15時	スポーツ(カラダ)
4	11/11(土) 10-15時	演劇(ココロ)
5	11/25(土) 10-15時	社会福祉(クラシ) ◆オーダーメイド学習
6	12/9(土) 10-15時	成果発表会の準備
7	12/16(土) 10-15時	
8	12/17(日) 10-12時	成果発表会 修了式

●参加条件

- ①受講申込書の提出のうえ、事前に長野大学の学生と面談できること
- ②公共交通機関等を使って(※移動を家族等にお願いすることも可)、長野大学まで来ることができること
- ③成果発表会への参加を含め、プログラムに積極的に参加できること

プログラムは、一部を除き、昼食を含め、5時間のメニュー。このメニューを了解の上、事前面談の実施、移動にかかる自立、プログラムへの積極的参加という3点を緩やかな参加条件として設定した。この考え方のもと、募集活動の結果として9名が「カレッジ長大」の受講者となった。また、このプログラム・メニューを貫いている基本的考え方の底には、以下の「カレッジ長大」コンセプトが流れている。

「カレッジ長大」コンセプト

「カレッジ長大」コンセプトは、以下のとおりである。

情報(コト)×モノづくり(モノ)×スポーツ(カラダ)×表現(ココロ)×社会福祉

(クラシ)

STEM

A

で障害者対応型 STEAM 教育を体験として《アソビュ!》しながらマナブ

障害者対応型 STEAM 教育について、令和5年度については、STEAM のなかで、STEM を横目で見ながら、「A」の部分を中心にプログラムを構築していった。

スポーツ(カラダ)と社会福祉(クラシ)については、本学の基幹教員と一部、外部講師が担った。表現(ココロ)については、外部講師を招聘した。外から見える形で表現する運動や演劇の手法を借りながら、自由になるための体験(liberal arts)を積み重ねた。STEM に比べて A が大きくなっているのは、表現することの大切さを言い表している。このことが、12月に成果発表会につながった。

「カレッジ長大」にかかる具体的なサポート体制

「プログラム関連の学内組織(教職員、学生スタッフ、コーディネーター、ボランティアサークル等)」、「受講者の応援団(家族、職場、友人等)」、「上田市等自治体」、「連携協議会」

の「4つの軸」を設定して、本事業プログラムを運営・展開していった。

学内の教職員で構成する「事業推進担当者会議」が実務上の中枢となりながら、学生スタッフが実際のプログラム時には、その遂行の中止的役割を果たし、時には、受講者の家族からの暖かい応援によって「カレッジ長大」は進められていった。

3. 準備・事前研修

(1) 準備編

準備編においては、「受講者集め」と「学生スタッフの組織化」、この2点が大きなポイントであった。

① 受講者集め

「事業推進担当者会議」において「カレッジ長大の概要」で記載しているような受講の条件を決めながら、受講者の属性として、ある程度まとまった層に収まっていた方が運営上やりやすいのではないかという意見のもと、第1回連携協議会において、学校卒業後以降の20代を主たる層として考えたらどうだろうかという助言を得た。

「事業推進担当者会議」としては、特別に受講者集めのための方策があったわけではない。社会福祉士実習・精神保健福祉士実習で本学と関係のある施設に「カレッジ長大」受講者募集のチラシを置かせてもらい、その中で受講者が集まればよいといった楽観的な思いで受講者集めを考えていた。しかし、第1回連携協議会での審議の中で、チラシ置きのみでは受講者集めは厳しいのではないかという意見も出て、連携協議会委員のネットワーク等を用いながら、受講者9名(定員は10名)という結果となった。

② 学生スタッフの組織化

2023年8月中旬に受講者9名が決定した。受講者定員10名を想定して、学生スタッフは、20名の確保を計画した。学生スタッフの募集については、授業科目「ボランティア論とその活動」での広報、教員のゼミナール生への個別の声かけ、学生スタッフ個々のネットワークを使って関係を広げていった。その結果、環境ツーリズムの学生が入ったり、学年も1~4年まで多様な学生集団となった。

学生スタッフの内訳は、ア)統括、イ)受講者受付係・合理的配慮係・講師係、ウ)広報・記録・会計、エ)サポーター係、オ)サポーター係のとりまとめ役兼ピンチヒッターの5つを設定した。先行事例としてのオープンカレッジ(青年学級)の中には、障害当事者の受講に際しマン・ツー・マンでのサポートを行うサポート学生を配置しているところがあり、本学もそれを導入した。

《学生スタッフの内訳/計18名》

- ・学年別～1年生/6名、2年生/10名、3年生/1名、4年生/1名
- ・男女別～女性/14名、男性/4名
- ・学部別～社会福祉学部/17名、環境ツーリズム学部/1名

(2) 事前研修編

「カレッジ長大を実施するための事前研修に際して」

コーディネーター 三村 仁志

2023年度カレッジ長大の取り組みに際し、運営を担う学生の皆さんと事業の目的、意義について共有し、グループワークを含めスタッフとして運営を担う学生の基礎知識、支援の考え方などの研修を事前に2日間実施しました。

現在の障がい福祉をめぐる動向は障害者権利条約からの要請により、ますます当事者主体の生活やインクルーシブ社会の実現が求められています。カレッジ長大も障がい者の生涯学習支援の取組の一つであり、障がい者の社会参加、活動の幅を広げることに寄与するものだと考えました。

研修では、まずは障害者権利条約について理解を深めました。「“私たちのことを、私たち抜きに決めないで” (“Nothing About Us Without Us”)」とした、障害者権利条約の中核的なキーワードはカレッジ長大の事業についても中核的な考え方であり、参加する障がい当事者の皆さんの主体的な学びの場を提供することが重要だと考えたからです。

国連の障害者権利委員会は2022年9月9日、障害者権利条約により8月22、23両日にスイスで実施した日本政府への初審査の総括所見(勧告)を発表しました。勧告の中で「強く要請する」と力点を置いたのは第19条(自立した生活と地域社会への参加)と2

4条（教育）に関することです。この強く要請（urges）という表現を使ったのは、第19条と第24条のみとなっています。

第24条では、強く障がいのある子どもの教育に関する権利を認識するように、また、すべての障がいのある生徒がすべての教育レベルにおいて合理的配慮と必要な個別支援を受けられるように求めています。その上で、質の高いインクルーシブ教育に関する国家行動計画を採択するように強く要請しています。このことは、障がい者の生涯教育を実現するトリガーであると感じています。

また、障害者権利条約の中核的な思想でもあり、障がい福祉を考えるうえで最も重要な理念であるノーマライゼーションについて共有しました。私事ではありますが、長年、障がい福祉に携わってきたワーカーの想いをスタッフとしての学生に伝えたいと感じていました。それは、「障がいを持った人たちが、その人らしく幸せに生きられる社会こそ、全ての人が豊で幸せな社会であるはずだ」というものです。

「ノーマルな社会をつくる」ことこそノーマライゼーションの思想であり、糸賀一雄先生が残した「この子らを世の光」という福祉の思想と併せ、若いころから信じて仕事をしてきました。個人的にはカレッジ長大に携わる事もその一環だと考えています。

もう一つ、事業の進行に重要な観点は参加する障がい当事者の皆さんの主体的な学びを保証するための意思決定です。意思決定支援は障害者権利条約において重要な条文である第12条関連で、上記総括所見において「(b) 必要としうる支援の水準や形態にかかわらず、全ての障がい者の自律、意思及び選好を尊重する支援を受けて意思決定をする仕組みを設置すること」と勧告がなされています。

障がい者との交流があまりないという学生に対し、障がい特性などについてお話ししました。一般的な特性であり個別化して支援する必要性を強調しました。お一人おひとり違うので直に信頼関係を結ぶことの方が大切だと考えました。

事前学習のあとに事業のスムーズなスタートを目的に学生達が参加当事者の皆さんとお会いする場が設定されていました。その際、ご本人の希望や学習へのニーズを明らかにする必要があります。そのためアセスメントの手法について学びました。アセスメントの目的と方法、プロセス、面接技法などを概観しました。

初回の出会いで当事者の皆さんのことを知り、支援者である学生本人を知ってもらうこ

とを目標としました。そこでは、参加していただく際に特に配慮が必要な事もしっかりお聞きすること、何を学びたいのか、何に期待しているのか等を把握していただくこととしました。「意思及び選好を尊重する支援」のためのアセスメントを行うことの重要性を強調しました。

文部科学省（2019）「障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障がいの有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して―（報告）」では、目指す方向性として「誰もが、障がいの有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会の実現、障がい者の主体的な学びの重視、個性や得意分野を生かした社会参加の実現」を挙げています。

研修において確認したカレッジ長大の意義については、インクルーシブ教育・インクルーシブ社会の実現に寄与することであり、参加してくれる当事者の皆さんの生きがいや自己実現を目指すこと、社会参加の幅を広げることと考えました。この活動を通して学生支援スタッフの学習・成長ももう一つの柱であると考えました。「インクルーシブ社会はインクルーシブ教育から」との言葉がありますが、カレッジ長大の活動を通じて学生が体験する一連の活動の意義があると考えました。前者がマクロ的な視点だとすると、後者はミクロ的視点、実際の活動の視点での把握だと考えました。

5. プログラム実施状況

(1) 第1回～第7回

第1回 社会福祉（クラシ）

第1回カレッジ長大では、社会福祉（クラシ）について取り組んだ。今回は、受講生が快適な生き方を指すというねらいのもと、自分や他者、日常生活について知るためのプログラムとなった。サポーター系の学生と受講生は一度事前面接を行っており、顔を合わ



せていたが、その他の学生と受講生、そして受講生同士の顔合わせは初めてであった。教室には緊張感が漂っていた。

全員が集まり、カレッジ長大の開講の言葉や学長挨拶、オリエンテーションを行った。どの受講生も真剣な面持ちで話を聴き、カレッジ長大へのやる気を伺うことができた。

そして、午前のプログラムに取り掛かった。初めに自己紹介を行い、これからのカレッジ長大で使用していく名札づくりに取り掛かった。色画用紙や折り紙、色ペンなどを使い、それぞれの豊かな個性を出しながら作り進めていく。その中で会話がはずみ、緊張がほぐれていく様子が伺えた。お互いの好きなことやもの、趣味などを知るきっかけとなった。

昼食の時間には、全員が大学内にある食堂へ行き昼食をとった。過ごし方は各々自由であったが、会話を楽しんだり、気になることを質問したりするなど、楽しげな空気が広がっていた。中には、大学を散策している様子も見られた。



昼食を取った後は午後のプログラムに移った。カレッジ長大で頑張りたいことや、課題になってくることについて考えていった。4～5人でグループを組み、話し合いを進めていった。最初は何を頑張りたいのかを見つけることが難しかったが、聞き方や考え方を変えるなどといった工夫を重ねていき、多く

の意見が出るようになっていった。午前よりもさらに教室が賑わい、笑顔が広がっていく様子が伺えた。

（文責 山田菜滉）

第2回 学園祭を楽しむ

第2回カレッジ長大は長野大学で開催された学園祭に参加した。大学を知るための体験ツアーというねらいで行われた。学園祭を楽しみにされている方が多く、当日も欠席することなく全員が参加した。



最初は、まだ2回目ということもあり、サポーターとの距離感があるところも多く見られた。環境的に人が多いことなど受講者が苦手とする状況を避けることが難しい場面もあった。しかし、徐々に空気感にも慣れ、自分の意思をサポーターに伝え、興味があることを中心に様々な催し物に参加し、楽しんでいた。

受講生の多くは、はじめどこに行きたいかという学生スタッフの問いかけに対して、「わからない」という返事が多かった。しかし、だんだんとパンフレット等を見たりして「ここに行きたい」、「ここが気になる」などと積極性がみられるようになっていった。また、普段ともに行動している受講生同士が分

かれて個々に行動したことによって、よりその人自身を知るきっかけにもなり、サポーターとのコミュニケーションも取りやすくなっていく様子が見受けられた。この第2回の活動では、支援の面でとても重要となる「信頼関係」の構築がされていく過程がみられた。受講生のなかで個人差はあったが、どのペアも第1回よりもコミュニケーションが取れるようになっていた。



自分のことを話すことに抵抗を感じている受講生も多く、打ち解けるまでに時間がかかり、学園祭を楽しむ時間が足りなかったという意見も多くあった。じっくりと関わりに時間をかけることが信頼関係を作り上げていくためには必要なのだと活動を通して感じられた。

(文責 小山葵)

第3回 スポーツ（からだ）

第3回カレッジ長大は「スポーツ（からだ）」のテーマで活動が行われた。カレッジ長大



のスタッフとともに、長野大学の野口教授、ゼミ生らの協力のもと、プログラムが進行した。活動はラジオ体操から始まり、受講生は、サポーター係とともに音楽に合わせて身体を動かし、互いにストレッチを行った。第1・2回の活動では緊張していた受講生とサポーター係のペアも、緊張がほぐれていたようだった。

準備運動のあと、「ポッチャ」を行った。

ポッチャとは年齢、性別、障がいのあるなしにかかわらず競い合うことができる競技だ。2つのチームに分かれ、ジャックボールと呼ばれる白いボールに向かって、自分のチームのボール（赤／青）を投げたり転がしたり、相手チームのボールにぶついたりする。全てのボールを投げ終わったときに、ジャックボールにボールが近いチームの勝ちとなる。



試合が始まったばかりのとき、受講生の中には大勢の人の前でボールを投げることに抵抗



を感じている方もいた。しかし、試合を重ねる中で徐々に自分から前に出て動いたり、サポーター以外のスタッフや受講生同士で話したりする様子も伺えた。試合が進む度に、身体全体で喜んだり悔しがったりと全体の雰囲気も盛り上がっているように感じた。

参考文献：一般社団法人日本ポッチャ協会「ポッチャとは」

後半は「2023年スペシャルオリンピックス夏季世界大会・ベルリン」（ユニファイドサッカー®M2クラス）で金メダルを獲得したスペシャルオリンピックス日本・長野チームの石山裕太（アスリート）氏、望月大輔（パートナー）氏のお二人を招いて、ユニファイドサッカーを行った。競技に入る前にスペシャルオリンピックス、ユニファイドスポーツ®について以下のような説明を受けた。

【スペシャルオリンピックス】

スペシャルオリンピックス（英語：Special Olympics、略称：SO）とは、知的障害のある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じ提供している国際的なスポーツ組織である。（2023、スペシャルオリンピックス公式サイト）

【ユニファイドスポーツ】

ユニファイドスポーツ®（Unified Sports®）とは、知的障害のある人（アスリート）と知的障害のない人（パートナー）で混合チームを作り練習や試合を行い、スポーツを通じてお互いに相手の個性を理解し合い支え合う関係を築いていく取組である。（2023、スペシャルオリンピックス）



1. パス練習

最初に選手が数種類のパスの見本を披露した。それを手本とし、パス練習を行った。パート



ナーとアスリートが協力している姿が見られた。

2. ミニゲーム

コートの中に得点用ボールを設置し、そのボールを相手の陣地の規定ラインに入れるというミニゲームを行った。ミニゲームが進行するにつれて、声援が大きくなっていった。笑顔だけでなく、敵チームにゴールされた時は悔しさを表現していた。

3. 後半を通して

ユニファイドサッカーを通して、以前より受講者とサポーターの信頼関係が深まった様子が休憩中の会話などから伺えた。最後は、スペシャルオリンピックスの選手と写真撮影を行うなど終始楽しんでいる様子だった。

（文責 宮内夏菜（前半）、霜山和馬（後半））

第4回 演劇（ココロ）

千葉県から特別講師を招き、演劇に取り組んだ。午前中は午後の演劇の発表に向けた準備体操などが行われた。

じゃんけんの「グー」「チョキ」「パー」を声と体全体を使って表現した。参加者全員で和気あいあいと取り組んでおり、演劇と聞いて緊張して固くなっていた受講生の心も体もほぐれたのではないだろうか。大きく動くのが楽しすぎるあまりに暑くなり、上着を脱ぐ受講生もいた。



次に仲間同士で集まるゲームが行われた。

「眼鏡をかけている人とかけていない人」など視覚的にわかるお題や、「朝食で食べたのはご飯かパンかそれ以外か」など見ただけではわからないお題もあった。受講生とサポーターは基本的に一緒にいるが、この時は離れ離れになっていた。そのため、今まであまりかかわりのなかった学生と受講生のつながりが生まれた。

少し遅めの自己紹介の時間となった。自分の名前と好きな食べ物を発表した。これまでの活動で好きな食べ物を発表する機会がなかった。そのためこの場でお互いの好物が初めて共有された。同じものが好きな人が近くにいると親近感がわき、心の距離がさらに近くなっていた。



午後はショートミュージカルの発表に向けての準備が始まった。「〇〇で働く」「〇〇を頑張っている」というセリフを言う場面では、受講生がそれぞれ頑張っていること、職場のこと、好きなことを発表した。声を人前で出すことに対して抵抗感がある受講生や、緊張してしまいなかなかセリフを言い出せない受講生もいたが、慣れていくにつれ自然と声が出るようになっていった。



次にダンスの練習をした。音楽に合わせて身体を動かしたり、手をつないだり、全員で歌ったりと非常に明るい雰囲気になっていった。体を動かすことが好きな受講生も多いため、笑顔で生き生きとした表情が多く見られた。自然と全員から笑みが溢れ出ていた。

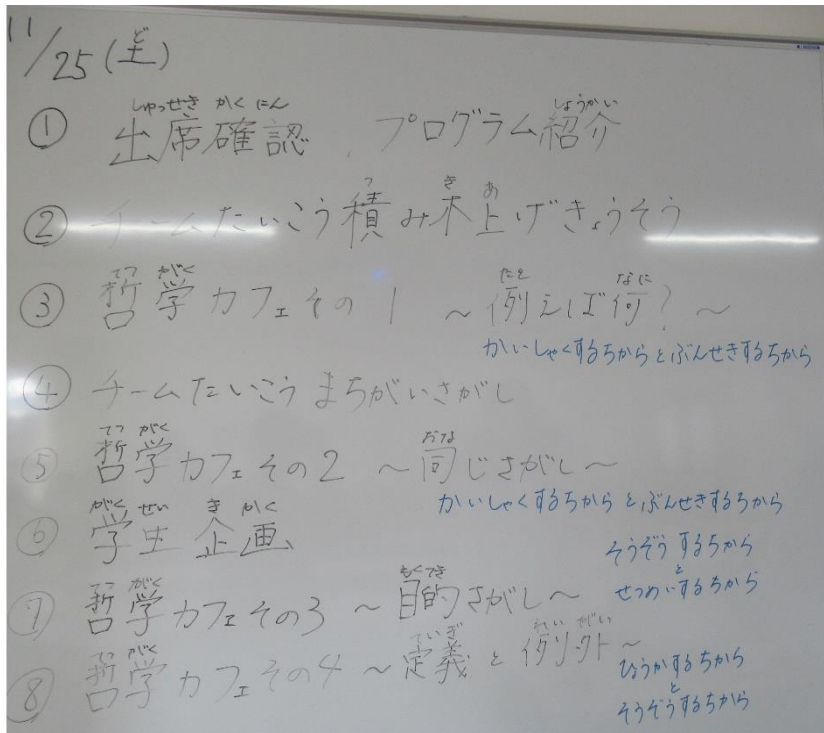
最後は、講師の方に用意していただいた衣装を身にまとい、セリフやダンス、歌の練習の成果を発表した。発表をする側、見る側どちらも楽しむ様子が見られ、明るい雰囲気笑顔が絶えない発表であった。人前に立つことが苦手な受講生も最後は堂々と発表することができていた。発表が終わると教室全体が達成感でいっぱいになり、お互いを称える拍手で包まれた。



(文責 森隆之助(前半)、中原蒼生(後半))

第5回 社会福祉(クラシ)

事前にサポーター係を通じて受講者の要望を聞き、活動内容を決定した。



午前中は、まずアイスブレイクとして積み木上げ競争を行った。サポーター係も交えて受講生同士で5、6人のグループを作りチーム対抗で行った。チームごとに異なる作戦を立て、受講生同士で声掛けをしながら熱心に取り組む姿が見られた。

次に、「大学らしいことをしたい」という声をもと

に、「哲学カフェ」という活動を行った。哲学に触れるための準備として、はじめは、解釈する力と分析する力を使う活動として、形容詞で表されるものを、「たとえば何？」という視点で考えた。アイスブレイクの効果もあり、サポーター係と一緒に答える姿や、受講生同士で相談する姿が見られた。全体の前で堂々と発表する受講者もあり、リラックスした状態で活動を行っていた。

再びアイスブレイクとして、間違い探しを行った。間違いを見つけようと真剣に考えグループ内で話し合っており取り組んでいた。どこが間違っているかスタッフに教えてくれる姿や、「ここは？」と積極的に意見を言い続ける姿も見られ、協力して活動が行われていた。

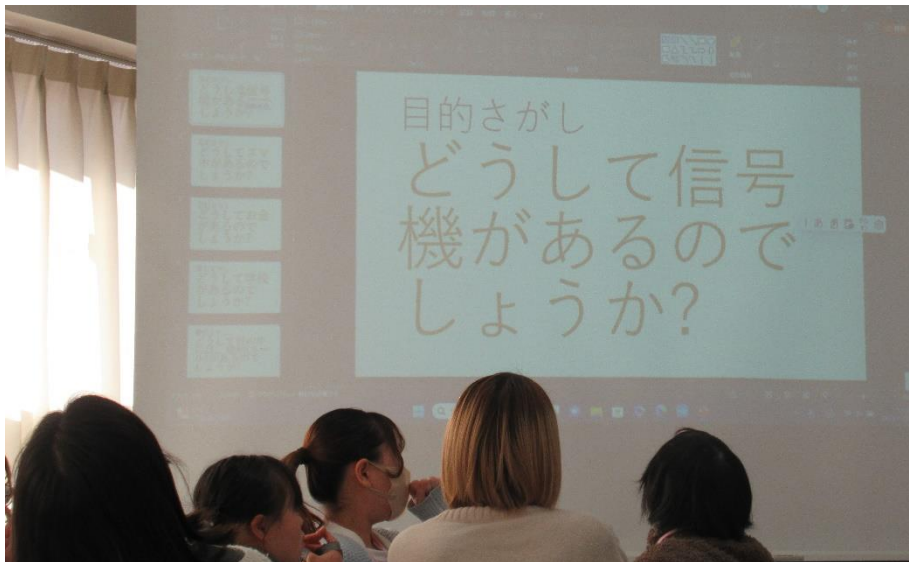


午前の最後は、再び「哲学カフェ」を行った。二つのものを比べ、共通点を探すという活動で、一度目よりも慣れた様子で話し合いや意見発表が行われていた。全体の緊張がほぐれているように感じられた。

午後はアイスブレイクから再開し、受講者からやりたいこととして挙げられていた『王様ゲーム』から始まった。午前中に分かれたグループになり、受講者とサポーターグループが3つ、学生連合(学生スタッフのみでのグループ)が1つで盛り上がった。

王と書かれたくじを引いた人が好きな番号を決め命令をし、呼ばれた番号の人が命令をこなすというゲームだ。受講者同士の関わり合いができるだろうかという懸念もあったが、自身のサポーター以外の人たちと関わることを目的としていた。受講者同士が話すのもそうだが、ハイタッチや握手など、身体を動かして関わることにもチャレンジして欲しいと考えていた。内気な様子だった受講者が、自らくじ代わりに割り箸を配ったり、「王様だ〜れだ」と声をかける姿が見られたりするなど、コミュニケーションをとれるようになり、笑顔が増えたという話があった。

アイスブレイクの後には哲学的な学習へと転換していく。「どうして〇〇が必要なのか?」「〇〇の定義は?」と、午前中行ったことのさらに応用編としてプログラムが進められていった。「どうしてお金があるのか」という問いに対し、各々の意見や考えを述べ、他者へ提示することができていた。「自分が使う」という視点、「社会の治安をよくする」という視点、「だれかの心を動かす道具」という視点など着眼点が様々で、自分にはない考えや価値観を共有する時間となった。難しい問いであっても、考えようとする姿が印象的だった。



第5回のプログラムは受講者同士の関わりを重点に置き、アイスブレイクやグループでの意見交換を多く取り入れたプログラムであった。第1回と比べ、話し声や笑顔が増え賑やかになり、

もともとあった穏やかな空気感に活気が溢れたような感触を覚えた。受講者が自らコミュニケーションをとる姿や、楽しんで話す様子が見受けられ、スタッフとしても嬉しさを覚える時間となった。

(文責 青木夢花[前半]、小宮山瑠海[後半])

第6～7回 成果発表会準備

第6回カレッジ長大は成果報告発表会に向けて準備を行った。テーマは「私」編であり、受講生は自分について考え、それをパネルに自由に表現するという活動を行った。受講生は、サポーター係との話し合いを通して「私」についての理解を深め、自分に関することを文字、絵、折り紙などを使って、自分らしさのあるパネルを制作していた。



最初は、何を表現すればいいかわからないと感じる受講生も多かったようだが、サポーター係が表現する内容をいくつか提案することで、自分が描きたいものを決めることができていた。

自分の表現したいものが決まってからは、制作がスムーズに進み、受講生も楽しく活動していた。絵を

描くことが得意な受講生は、カレッジ長大に関わる一人一人の似顔絵を描いたり、折り紙を折ることが好きな受講生は、好きなキャラクターを折り紙で折ったりするなど、それぞれ装飾に力を入れていた。また、この活動を通して、受講生はサポーター以外の学生スタッフともたくさん交流していた。カレッジ長大を開始した当初よりも受講生と学生スタッフの距離は縮まり、活動中は教室に賑やかな声が響いていた。

第7回のカレッジ長大も成果報告発表会に向けて準備を行った。前回に引き続き「私」編のパネルの制作とその発表に向けた個人練習、そして「共通」編のパネルの制作を行った。「共通」編では女性受講生と男性受講生に分かれ、それぞれグループとしてパネルを制作した。一人一人がカレッジ長大に対して思ったことや、活動を通して感じたことなどをパネルに書き、たくさんの思いが込められたパネルが完成した。

自分の思いを文字に表現することに消極的な受講生もいたが、他の受講生の姿を見て、自分の言葉をパネルに書く様子も見られた。グループでの活動だったため、受講生同士の交流が多く見られた。「友達ができて嬉しい」という声もあり、受講生たちは活動を通していっそう仲を深めているようだった。



(文責 佐度明日菜)

(2) 第8回 成果報告「私」編

【パネルを用いた受講者とサポーター学生との協働発表】

テーマ「自分の好きなもの」



1. パネルの意図と制作過程

① パネル制作の目標

受講者Tさんと話し合い、「自分の好きなもの」について、皆の前に立って自分で発表することを目指した。

② 工夫したこと

「好きなもの」をジャンルごとに分け、折り紙に書いて貼った。また、好きなキャラクターを折り紙で作って、「好きなもの」を詰め込んだパネルにした。

③ 苦労したこと

「好きなもの」「折りたいもの」について、悩む様子が見られた。ジャンルを提示すると、沢山挙げることができ、多くの時間を折り紙作成にあてることができた。

2. 成果発表会

「原稿を作ってほしい」というTさんの希望があった。話し合ってから発表原稿を作成し、それを基に発表を行った。

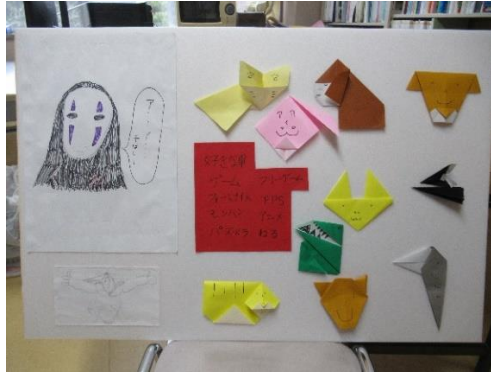
Tさんは大勢の前に出ると恥ずかしくなってしまうため、自分が注目される場面では隠れてしまうことが多かった。知らない人が来る中で前に立って発表できるだろうかという不安があった。しかし、本番では堂々と発表することができた。第1回から第7回までに比べて言葉の発音がはっきりしていた部分が印象に残り、成長が感じられた。

3. サポーター係として関わった感想

事前面談の際には目が合わず、一言も会話できなかったが、回を追うごとに筆談が必要なくなり、コミュニケーションが円滑になっていった。障がいの有無に関係なく、それぞれの意思があり、それを尊重しつつ関わっていくことの大切さを学んだ時間だった。

(文責 金井 陽愛)

テーマ「好きなこと」



1. パネルの意図と制作過程

①パネルのテーマ

受講者 T さんの「好きなこと」をテーマとして制作した。パネルの中心には T さんが好きなゲームや寝ることについて、画用紙に文字で書いて表現した。左側には絵を描くことが好きな T さんがゲームや映画のキャラクターを描き、右側には折り紙で作った、たくさんの動物や紙飛行機を貼った。

②工夫したこと

折り紙で何を作るか、折った折り紙や画用紙はどこに貼るかなど、多くを T さんの意思に任せ、テーマである「好きなこと」が最大限表現できるようにした。

③苦労したこと

パネルのテーマを決めるときや、何の絵を描くか決めるときに時間はかかったが、決まった後の作業はスムーズに進んだため、完成させることができた。

2. 成果発表会

T さんは人前での発表に苦手意識があるようで、最初はサポーターが発表をする予定だった。しかし、第 4 回の演劇で感想を話していたこともあり、自身での発表を勧めてみた。すると、「短い文章ならできそう」と話してくださったため、短めの文章の原稿を T さんとともに作成した。本番では、原稿をもとに堂々と発表しており、成長と共に嬉しさを感じた。

3. サポーター係として関わった感想

カレッジ長大の最初の方は、T さんとサポーター係の 2 人での関わりが多かった。しかし、回数を重ねていくうちに、自然とほかの受講者さんやスタッフなどとも話すようになっていった。信頼関係を構築するために、コミュニケーション技法も必要だとは思いますが、このように関わる機会がたくさんあることが大切だと実感した。

(文責 熊谷亜弓)

テーマ「アメージング・オアシス」



1. パネルの意図と制作過程

① パネルのテーマ

受講者のFさん自身がパネルのテーマを「アメージング・オアシス」に設定し、制作を進めた。パネルの真ん中に湖をイメージした青色の折り紙を貼り、その周辺に折り紙で折った白鳥や草花、さまざまな動物を添えた。

② 工夫したこと

切り絵で作ったキャラクターを隠し絵にして、見る人が楽しめるような工夫を施した。

③ 苦労したこと

装飾にこだわりを持っており制作期限を越えても仕上げるができなかったが、作業時間を区切ったり、装飾を手伝ったりして完成させることができた。

2. 成果発表会

意見を出し合って発表原稿を作成し、それをもとに発表を行った。自己紹介と最後の挨拶の際にお辞儀をするのはFさん自身のアイデアであり、「発表はていねいにするのが大切」と仰っていた。

Fさんは緊張をすると声が出なくなってしまうことがあり、第1回から第7回を通して人前で発言できなかった。そのため、Fさん自身は声を出して発表をできるかの不安を感じていた。しかし本番ははっきりとした声と態度で発表をすることができた。Fさんの堂々とした姿からカレッジ長大を通しての成長を感じることができた。

3. サポーター係として関わった感想

事前面談から成果発表会まで密接に関わり続けるなかで、Fさんの成長を感じるとともに自分自身も成長することができた。障がいの有無に関わらず一人の人として接して、「その人」に合わせたコミュニケーションを取ることが重要だと実感した。

(文責 小林凜)

テーマ「自分の好きなことを人に伝えたい」

1. 発表に向けての準備

発表の準備段階では、「発表したいテーマを本人から聞き出せるかどうか」という課題が挙げられた。私がサポート係を担当したHさんは抽象的な質問に「分からない」と答えることが多く、本人も困ってしまうことが度々あった。そこで、パネルを制作する上では、完成形をイメージしやすい具体的な質問をし、Hさんが自分の内面を表現できるように心がけた。

Hさんの「自分の好きなことを人に伝えたい」という言葉を踏まえ、それをそのままテーマとして活用することが決まった。他にも、書く



内容や貼る折り紙を鶴やフクロウにすること、使うペンの色など細かい部分までHさんの思いを反映したパネルに仕上がったと言える。また、発表はサポート係である私がインタビュアーとして質問をし、Hさんが好きなことを答えつつ発表をするというインタビュー形式で行なった。これは同じサポーター係への相談や、練習をする中でHさんと決め、「人前で話す事に対する緊張」を緩和する狙いがあった。

2. 発表当日の様子

当日のHさんは少し緊張していたが、発表前の練習の時に「自分のセリフを最後まで言えるようにしたい」という能動的な姿勢も見られた。その後、教室内の明るい雰囲気にならずに普段通りの笑顔になる場面もあった。当初はサポーター係に発言の代替を頼むことの多かったHさんだったが、当日は最後まで自分で発表をするという前向きな変化が見られた。

3. カレッジ長大を経て

私はカレッジ長大に参加するまで「障害を持った人との一対一でのコミュニケーション」を経験したことがなく、非常に貴重で今後の糧となる時間だったと思う。プログラムを通じて、障害の有無に焦点を当ててではなく「相手はどんな人なのか」「自分を知ってもらうにはどうすれば良いか」など1人ひとりに合わせた意思の疎通が重要だと気がついた。そして、「受講者とプログラムを共に体験すること」は会話を交わすだけでは生まれない、新たな信頼関係を構築する方法だと実践的に学ぶことができた。

(文責 相田真歩)

テーマ「私の趣味」



制作過程

計画をたてる：Sさん（仮名）の場合は「私の趣味」をテーマとして計画をたてた。パネル作成のために話し合いの段階で趣味に関わる事項が出た。それを受けて「私の趣味」をテーマとしてはどうかということをサポート一係から提案し、Sさんに賛成していただいた。このよ

うにしてテーマが決まった後は趣味に関わる事項の掘り下げを行い、また別の趣味も複数挙げていただいた。この際思いつく事項が多かったため、考えの整理に苦労されていた。ある時点でパネル作成に入るかもう少し考えてみるかをお聞きしたところ、制作に入りたいとの意思を示された。そのため、パネルの制作を開始した。

パネル制作：ご本人で方針として「文字よりも絵や折り紙などで表現したい」ということをはっきりとサポーター係に伝えて下さった。具体的にはSさんが好きな特撮ヒーローシリーズの「仮面ライダー」や養護学校のイメージキャラクターを折り紙や厚紙を加工して表現されていた。想定時間に対して作業量が多くなると予測したため、途中手伝いを申し出た。しかし、以下の理由から手伝いはパネルへの製作物の貼り付けなどの単純作業を中心に行うにとどめた。{1.手伝いを申し出ても『好きなものを作っていていいよ』とおっしゃり、手伝いが必要な様子でない。2.Sさんの表現したいことが多くある様子だった。《製作物が多くできてきた》3.後半からSさんが自分からサポーター係に時間を尋ね、想定時間内に完成させるよう意識なさっていた。}

サポーター係の所感

最初は計画段階であまりお手伝いができなかったのではないかという思いもあった。しかし制作が終了した時点で、結果的には成功したと感じた。Sさんは細かく計画を詰めるよりは進めながら思いを形にしていくほうがやり方としては向いているように思ったからだ。

また、自分の趣味について考えたり、製作物で自分の好きなキャラクターを表現することによってSさんの自己理解が進んだと感じた。

パネルの作成段階ではサポーター係が支援することはほとんどなく、Sさんの思いのままにパネルを作成していただいた。結果として「私」を前面に出すというテーマに合致した、すなわちSさんの個性が表れた作品が出来た。

（文責：大橋温仁）

テーマ「『鬼滅の刃』の世界観」



1. パネルの意図と制作過程

① パネルのテーマ

このパネルでは、受講者 T さんの好きなものへの思いを表現している。T さんの好きな「鬼滅の刃」の世界観を表現するという意図のもと、T さんが好きなキャラクターやそのセリフなどを、折り紙に書き出したり折ったりして、パネルに貼り付けた。

② 工夫したこと

パネルに貼るパーツ 1 つひとつに、T さんの好きな世界観が表現できるようこだわった。

③ 苦労したこと

T さんから自身の好きな事やパネルで表現したい事を聞き出す事に加え、パネルに貼るパーツの制作に時間をかけたので、制作期限との兼ね合いには苦労した。

2. 成果発表会

当初、T さんは発表に対し積極的ではなく、自身で発表できるか不安であった。しかし、パネルに貼るパーツを作成する段階においては発表したい事や発表の流れを考えていたようで、発表前日のリハーサルからずらずらと自分の好きな事について紹介できていた。その後、リハーサルを踏まえ、発表で使う原稿を吟味しながら作り上げ、自ら積極的に発表の準備を抜かりなく行っていた。

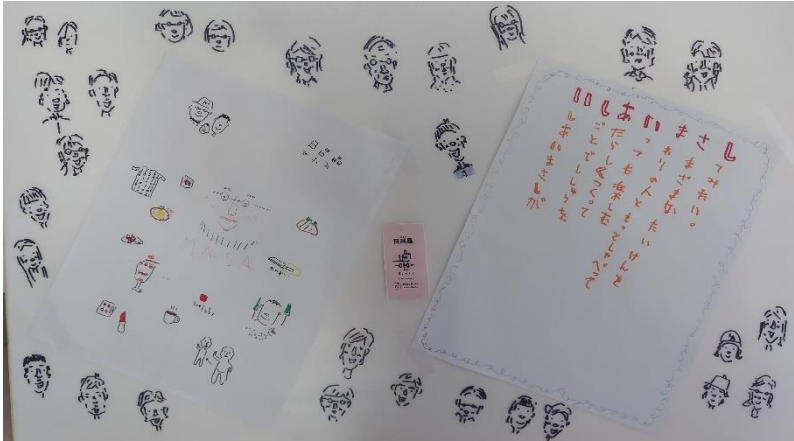
T さんはパネルの作成に積極的に取り組んでおり、発表も自らずらずらとできていた。カレッジ長大を通しての T さんの成長を感じた。

3. サポーター係として関わった感想

始めの事前面談や初回の活動ではかなり緊張されていた T さんが、カレッジ長大の活動を重ねて行くうちに周りの受講者と仲良くなる等の自ら成長する姿を見て、私も嬉しく思った。私自身も、相手に寄り添い助け合う事を、より深く実践的に学ぶ事ができた。

(文責 藤岡美希)

テーマ「私とカレッジ長大で一緒に学んだ人たち」



1. パネルの意図と制作過程

①パネルの説明

受講者の I さんは学生連合(学生のみの制作グループ)が考えていたあいうえお作文形式の修了証にとっても興味をもっており、自分の名前

で考えてみることに挑戦した。そして、I さんの伝えたいことを協力して一緒に言語化していきながら考えてみると、「名字」が〈現在の状況〉で「名前」が〈これからの目標〉になっていた。

また、カレッジ長大に参加して感じたこれからのやりたいことや趣味をマインドマップにしてまとめた。得意の絵で表現したいということで、自画像の周りに刺繍やパフェを食べること(趣味)、息子さんと2人で公園に行くことやカッター作業を上手に行えるようになること(やりたいこと)を表現していた。

真ん中のピンクの紙は I さんが作成した屋号で、発表の場で宣伝することとなった。そして最後に、カレッジ長大で一緒に学んだ人の似顔絵を周りに描いていた。似顔絵には、感謝の思いや一緒に学べた楽しさがこもっていた。

②工夫したこと

似顔絵は、発表の際に「頑張って全員描いたので、探してください」と伝えることで、見ている人が自分の作品を楽しみながら発表を聞けるよう工夫した。

2. 成果発表会

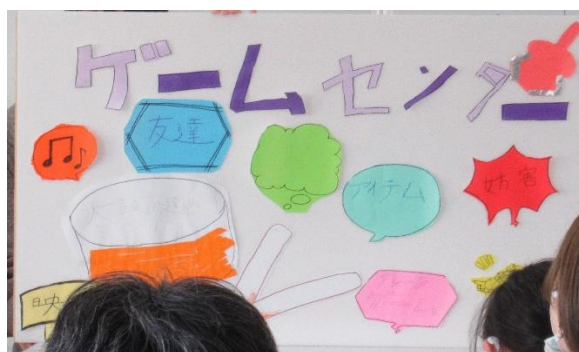
I さんは、発表原稿があった方が良くと伝えてくださり、原稿の言葉も I さんの伝えたいことを言葉に変換しながら一緒に考えることができた。家で発表する練習をしてきてくださり、トップバッターにも関わらず、I さん自身堂々と発表されていた。

3. サポーター係として関わった感想

I さんの発表から、苦手なことにも挑戦する姿勢や感謝の気持ちを忘れない様子を教わった。また、カレッジ長大を通して、障害者と支援者ではなく、一緒に学ぶ仲間として接することの大切さや相手の気持ちにより添う姿勢を学ぶことができた。

(文責：藤多梨里香)

テーマ「ゲームセンター」



1. パネルの意図と制作過程

① パネルのテーマ

受講者 K さんとの話の中で、最も多く言葉を引き出すことができたものが「ゲームセンター」であったため、パネルのテーマを「ゲームセンター」に設定し、制作を進めた。K さんの思いをテーマの周囲に吹き出しを用いて書き出す形をとった。

② 工夫したこと

K さんは図画工作などの制作に苦手意識を感じていた。そのため、シンプルな形や色使い、制作過程となるように工夫した。

③ 苦労したこと

K さん自身は、「なぜ好きか」を考えることが難しいようであった。そのため、思いを聞き取る際には、私の考えが K さんの思いに混在してはいないかと細心の注意を払って聞き取りを行った。

2. 成果発表会

発表原稿を作成することはせず、吹き出しに書いたそれぞれの思いをテーマに、自由に語っていただいた。その場で考え、言葉にするのに多少の時間を要することはあったが、K さん自身の言葉で思いを口にすることができ、達成感が得られているようであった。

3. サポーター係として関わってきた感想

活動を通して、K さんの交友関係の広まりを感じた。当初は既知の間柄であった S さんとの交流ばかりであったが、プログラムの進行に伴って S さん以外の人にも話しかけるなど成長を感じた。私自身も他のサポーターの接し方を参考に、話しかける際の声のトーンや目線、速度を工夫するなど意識的に行動することで後半には自然に接することができ、幅が広がり成長できたのではないかと感じた。

(文責 新田野乃)

テーマ「Uさんの取扱説明書」



1. パネルの意図と制作過程

①パネルのテーマ

受講者のUさんとの対話のもと、パネルのテーマを「Uさんの取扱説明書」に設定し、制作に取りかかった。

パネルのモチーフとしては、Uさんの恵まれた体格や、ありあまる魅力を表現できるようなものとして、〈大樹〉をUさんに見立ててレイアウトを決めた。

②工夫したこと

パネルの内容について、私の思いが先行しないようにするため、他の学生スタッフにUさんのイメージや印象を聞いたりして、いろいろな角度からUさんの魅力を表現できるよう心がけた。また、Uさんが折り紙を使った切り絵が得意なことを利用して、作品のあらゆる箇所にUさんの切り絵を散りばめた。

③苦労したこと

最初にパネル制作に関わって、Uさんの情報を集める必要があったが、Uさん自身、恥ずかしがってなのか、自身のことについてはぐらかし、あまり話してくださらなかった。しかし、知っていることや好きなことを具体的に掘り下げていくことで、最終的にはいろいろなことを教えてくださった。

2. 成果発表会

発表に関しては、主にパネルに書き込んだことの読み上げを中心に行っていこうとUさんと話した。残った時間は、アドリブでこなそうと考えた。というのは、今までのUさんとの関わりから、発表での原稿を完全に決めると、堅苦しくなってしまう、Uさんらしさを十分に発揮させることができなくなるのではないかと感じていたからだ。結果として、あまり考えずに挑んだことで、よりUさんらしさを表現できる発表となった。

3. サポーター係として関わった感想

カレッジ長大のプログラムの中でUさんと関わり、Uさんの魅力や成長に気づくことができた一方で、私自身、学ぶところが多くあった。障がいはその人の一つのエッセンスであり、その人の本質はその人自身のより深いところにあるのだと実感した。

(文責 太田 駿)

6. 学内外での連携等

(1) カレッジ長大事業推進担当者会議(学内)

回	日程	議題	一言コメント
1	2023. 5. 30	<p>★学校卒業後における障害者の生涯教育プログラム開発に向けて～長野大学版～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当該事業の取り組む背景と特徴 ・カレッジ長大のコンセプトと大学中期計画 ・同教育プログラムの全体像 ・同教育プログラム開発に向けての前提条件 ・2023年度の具体的な計画 ・カレッジ長大の具体的プログラム ・同教育プログラムの支援体制 ・同事業運営にかかるいくつかのポイントに関すること 	<p>左記の同教育プログラム開発に向け、長野大学が共生社会づくりに参画する一つ的手段として「カレッジ長大」を開催することや、長野大学の学生たちにもカレッジ長大のプログラムに参加してもらうことが強調された。</p>
2	2023. 6. 12	<p>★学校卒業後における障害者の生涯教育プログラム開発に向けて～長野大学版～</p> <p>にかかる個別具体的な詰めや、5/30以降の進捗状況の確認</p>	<p>受講対象者像の絞り込みや、学生スタッフの集め方など実際に即した動き方への対応協議</p>
3	2023. 7. 5	<p>★「受講者の募集について」の最終的な詰めを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受講者の大まかな像と募集方法 ・受講者集めのための広報媒体 ・受講者が集まった後の大学広報 	<p>第1回連携協議会(7/6)で協議された受講者募集について、学内的な調整ののち、短期間での募集となる。</p>
4	2023. 8. 1	<ul style="list-style-type: none"> ・受講者の募集について ・学生スタッフについて 	<p>夏期休暇を前にして、全体的な進捗状</p>

		<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターについて ・外部講師等について 	況、途中経過等の確認を行う。
5	2023. 8. 10	<ul style="list-style-type: none"> ・受講者募集の結果について ・学生スタッフについて ・コーディネーターについて ・今後の予定 	夏期休暇開始と同時に受講者の決定、及び学生スタッフの陣容が見えてくる。
6	2023. 9. 20	<ul style="list-style-type: none"> ・第5回会議(2023. 8. 10)以降の状況 ・9/19(火)～10/30(土)の予定 ・カレッジ長大の具体的プログラム ・コーディネーター業務内容(役割)について ・学生スタッフについて 	プログラムの開始を前にして、受講証の発行、関係者への案内、プレスリリース等やるべき多くの準備が見えてくる。
7	2023. 12. 20	<ul style="list-style-type: none"> ・カレッジ長大プログラム実施状況 ・成果報告書の構成(案) ・第2回連携協議会 ・特別支援学校との連携 ・2024年度文科省同事業について ・予算執行状況の確認 	同事業にかかる2023年度の実績評価と2024年度に向けての準備の両面で取組みを進める必要性が出てくる。
8	2024. 1. 31	成果報告書にかかる最終確認	

(2) 連携協議会

● 「カレッジ長大」第1回連携協議会を開催しました

【2023. 7. 6 大学 HP】

長野大学は、文部科学省の令和5年度「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」の委託事業に採択されました。「大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築」として「カレッジ長大」を運営していく予定です。



6月27日には、長野大学関係者・上田市・地域の福祉機関関係者で構成される「第1回連携協議会」が開催され、本事業の趣旨や方向性について話し合われました。本年秋頃の実施に向けてプログラムの開発、実施スタッフの募集・養成等を行っていく予定です。

● 第2回連携協議会（1月16日）～外部支援者とのすり合わせ～

【2024. 1. 23 大学 HP】



連携協議会開催にかかる元々の計画としては、年3回の実施予定でありましたが、本プログラム日程との関係等により、2023年度は年2回の実施となりました。

今回は、1年間の総括ということで、本プログラムの実施状況の報告と、教育機関・福祉関係者との連携やプログラム日程などのことを含めた次年度カレッジ長大の事業継続が中心的な議題となりました。事務局としては、受講者9名が全員、1回の欠席もなく、全出席であったことを強調しました。

また、成果報告会(2023. 12. 17)に出席した同会委員からは、カレッジ長大の活動を通じて障害当事者の成長や学生スタッフの学びなどの評価がなされ、2024年度以降の取り組み期待が寄せられました。

(文部科学省委託事業) カレッジ長大連携協議会規約

第1条(名称) 本会は、「(文部科学省委託事業) カレッジ長大連携協議会」という。

第2条(目的) 本会は、文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業<1>地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究 (3)大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築(高等教育機関におけるモデル構築)」実施要領に基づいて設置し、委託事業/カレッジ長大を円滑に推進することを目的とする。

第3条(活動) この会は、前条の目的を達成するために次の活動を行う。

- ① 連携協議会を、年3回程度開催する。
- ② 同協議会の学外メンバー・学内メンバーがそれぞれの立場から同省より求められている「効果的な学習プログラムの開発・実施」、「コーディネーターによる活動、ボランティアの育成」、「成果等の普及」について専門的な見地から意見交換を行う。
- ③ 学習プログラムの開発の方向性について、大学から地域に向けて行うことの中で、中核的組織として打ち出していく。
- ④ 同事業全体にわたる進行管理を行うとともに、同事業にかかる企画、実施、評価、課題の抽出等、PDCAの観点から専門的助言を行う。
- ⑤ 必要に応じて、同協議会の会外の社会資源の導入・活用等を提案する。
- ⑥ 同協議会の構成員は、全国各地の先進的な優良事例について情報収集や研究を行っていく。

第4条(構成員)

- ① 本会は、委員と事務局員から構成する。
- ② 委員は、委託事業/カレッジ長大に関係する、大学教職員、市町村の関係部局、社会福祉の関係機関・団体の関係者によって構成する。
- ③ 事務局員は、長野大学の教職員によって構成し、実務を担う。

第5条(財政) 学外の委員については、同協議会出席等については、交通費実費、謝礼等を支払うものとする。

第6条(事務所) 会の事務所は長野大学(〒386-1298 上田市下之郷 658-1 TEL 0268-39-0001(代)、FAX 0268-39-0002)に置く。

第7条(附則) この規約は2023年6月27日より施行する

(3) 広報 (HP 等)

「カレッジ長大」第1回（10月1日）スタート!

【2023. 11. 29 大学 HP】

約半年の準備期間をかけ、カレッジ長大が10月1日(日)にスタートしました。申し込みをし



てくれた9名の受講者が果たして全員来てくれるだろうか。学生スタッフ(18名)も、教職員もそれが一番の心配事でした。開講の10時、受講者全員、出席! 本日の一番の成果でした。

学長あいさつからプログラムが始まりました。

午前は、名札作りや自己紹介を行い、午後は、カレ

ッジ長大で頑張りたいことなどについて受講者と学生スタッフが話し合いを行いました。緊張と人との新しい出会い、とても充実した船出でした。

「カレッジ長大」第2回（10月14日）カレッジ長大生、学園祭体験!

【2023. 12. 5 大学 HP】



10/1(日)の第1回講義では、受講者の皆さんから「他の人に話しかけることができるよう頑張る」、「多くの人と交流したい」、「スポーツの体験が楽しみ」、「大学という場所を知りたい」など様々な思いを聞きました。【他の人と同じニーズ】ではなく、【私(受講者)のニーズ】への出会いです。

10/14(土)の第2回講義は、こういった【私(受講者)のニーズ】を踏まえて、長野大学の学園祭(りんどう祭)に触れるプログラムでした。大学を知る・触れるための体験ツアーは、展示物の見学、お祭りでよく見かける的当てなど企画ものへの参加、大学際といえば、定番の焼きそばを味わうなどそれぞれが楽しんだ2時間のメニューでした。

「カレッジ長大」第3回（10月28日）スペシャルオリンピックス（2023年6月、ドイツ・ベルリン）の金メダリスト登場！ 【2023.12.8 大学HP】



10/28(土)は、「身体ほぐしと一流のスポーツに触れる」ことをねらいとするプログラム。場所は、大学の体育館。午前は、夏休みの朝の定番(?)ラジオ体操第一からスタートし、カラダほぐしのためのストレッチで、「まずはけがをしないこと!」。「ボッチャ」(目標球と呼ばれるボールにいかに近づけるかを競うスポーツ)開始。見ていると、自分が持っているボールから中々手が離れない受講者もいました。ボールを大事にしているのかなあ?

午後は、知的障害のあるアスリートとない人(パートナー)とがチームメイトとして一緒にゲームをする「ユニファイドサッカー」に挑戦。ゲームが始まると、ヒートアップして、そこにスピードがくっつき、見ている側はヒヤヒヤ。

ゲームが終われば、お決まりの金メダリストとの写真撮影会。女性受講者の中には、手でハートを作り、お顔は、超スマイル。けがもなく、カラダが解放された1日でした。

「カレッジ長大」第4回（11月11日）いよいよ私も業界デビュー!? 【2023.12.11 大学HP】



11/11(土)は、「言葉と身体を使って、ココロをほぐす」演劇です。演劇を楽しみにしていて、ワクワクドキドキしながら、前日は眠れなかったという受講者もいました。いよいよ私も芸能界入りか?と思われた方もいるかもしれません。

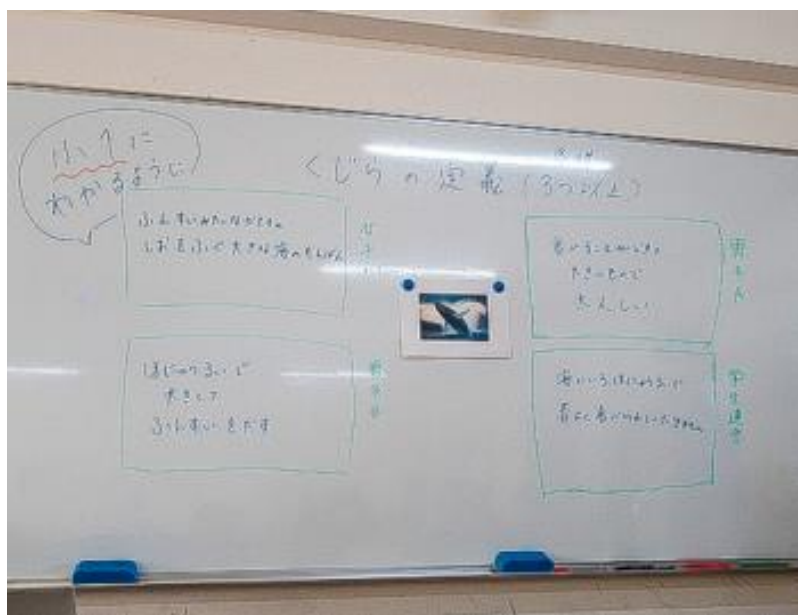
講師は千葉県からプロの演出、俳優をお呼びしました。舞

台作りの基本を説明したのち、役者、舞台スタッフ、観客のそれぞれ役回りの中で、演技(台詞)、歌唱、ダンスを体験しながら、最後は成果発表として全員参加のショートミュージカルに仕上げていくプログラムでした。最後は紙吹雪でエンディング。初対面で、4時間で作品が出来上がるものなのですね。感動でした。

受講者、学生の皆さん、キラキラ輝いていました！

「カレッジ長大」第5回（11月25日）ソツ、ソツ、ソクラテスか、プラトンか。ニツ、ニツ、ニーチェかサルトルか…

【2023.12.14 大学 HP】



11/25(土)は、スポーツ、演劇に引き続き、リベラルアーツの第3弾、頭の中を自由にするため、身近なモノ・ことをテツガクする「哲学カフェ」のオープンです。

第4回が終わったところで、学生スタッフ達とこれからのプログラムの進め方について話し合いの場を持ちました。受講者同士の交流、受講者がカレッジ長大に求めているもの、学生スタッフの受講者への想いなどが語られました。

本日は、はじめて行なう受講者同士のグループ活動。スタッフ側もドキドキ。アイスブレイクを踏まえ、「どうして信号機はあるのでしょうか」といった【目的さがし】など日常生活にかかるテツガクを実験しました(写真はクジラの定義)。そして、なによりも今回、学生企画のプログラムが登場したことは、カレッジ長大の大きな収穫でした。

「カレッジ長大」第6回（12月9日）、第7回（12月16日）表現者としての第一歩

【2023.12.25 大学HP】



受講者は、これまでカレッジ長大が用意したプログラム参加者としての関与でしたが、今回からステージが変わりました。これまでの学びの結果をどう表現するか、アウトプットするかの次元となりました。

12/17(日)の成果発表会に向けての準備です。テーマは「私の～」です。「～」には、好きな食べ物、好きなこと、好きな言葉、苦手とその克服などが入ります。基本は、「私(受講者)」を中心に据えることとしました。

発表のスタイルは、A1版パネルを用い、受講者・学生サポーターとの協働発表です。コンセプトは、「チャットGPTにできないことをやろう!」です。

折り紙などを用いた立体感のあるパネル、オーソドックスにコピー用紙に自分のことを書いて張り付けたものなど受講者9人ですから、【9人9色】です。お互いパネル作品を見ることができるものの、それがどのような形で17日に発表されるのかは全くわかりません。発表のリハーサルは別室でそれぞれ行い、ライブ感覚を秘しながら、16日を終わりました。

「カレッジ長大」第8回（12月17日）カレッジ長大 完走！！

【2023.12.26 大学HP】

10月から開始したカレッジ長大が、12月17日に最終回を迎えました。

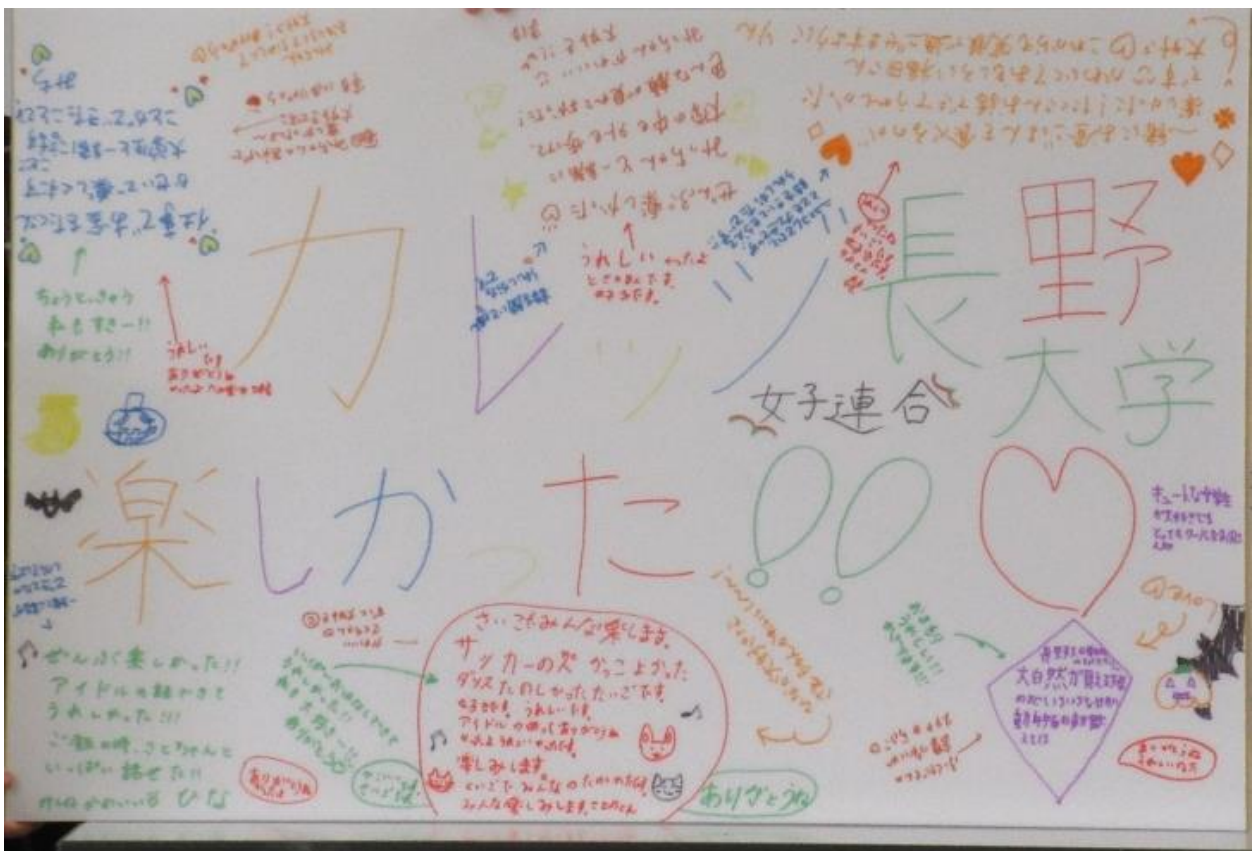
今回は、受講者のみなさんがサポーターの助力を得ながら作品を発表しました。どの作品もテーマや願いがふんだんに盛り込まれた力作揃いでした。また受講生・スタッフがそれぞれ

れこの2ヶ月を振り返り、カレッジ長大での思い出話をしながら、会えなくなることの寂しさを吐露していました。

最後には学長からの挨拶とともに、修了証が受講生に手渡されカレッジ長大はフィナーレを迎えました。2ヶ月間という短い期間でしたが、思い出を語る際の涙と、最後の笑顔が、この2ヶ月間が如何に濃密で有意義な時間であったかを物語っていたと思います。

カレッジ長大 2023 年度はこれにて終了となります。

See you Next...?



長野大学

イベント情報

発信元: 長野大学広報入試担当
〒386-1298
長野県上田市下之郷658-1
TEL:0268-39-0020
FAX:0268-39-0012

2023(令和5)年12月13日

文部科学省事業 障害のある人たちの学び直し 「カレッジ長大」の成果発表会・修了式の開催

長野大学では、10/1(日)から学校を卒業した18歳以上の障害のある人たちに向けて学習の場を提供するプログラム(全8回)を実施してきましたが、12/17(日)で修了となります。

本プログラムは、令和5年度文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業<1>地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究 (3)大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築(高等教育機関におけるモデル構築)」について、本年度、本学が「STEAM教育の要素を取り入れた障害者の学び直し(Reskilling)モデルづくり」というテーマで受託した事業です。

本年度は、STEAM教育のうち「A(arts)」に特化する形で、プログラムを作成し、社会福祉の観点の他、スポーツや演劇の要素を組み入れた構成にしました。12/17(日)は、これまでの学びの成果として、パネルを用いて、受講者と学生と協同で成果発表会を行います。当日は、受講者のご家族や相談支援事業所の担当支援員の方などもお見えになる予定ですので、是非取材くださいますようお願いいたします。(成果発表終了後に修了式を開催いたします。)

成果発表会・修了式: 令和5年12月17日(日)

◆ 時 間: 10時~12時

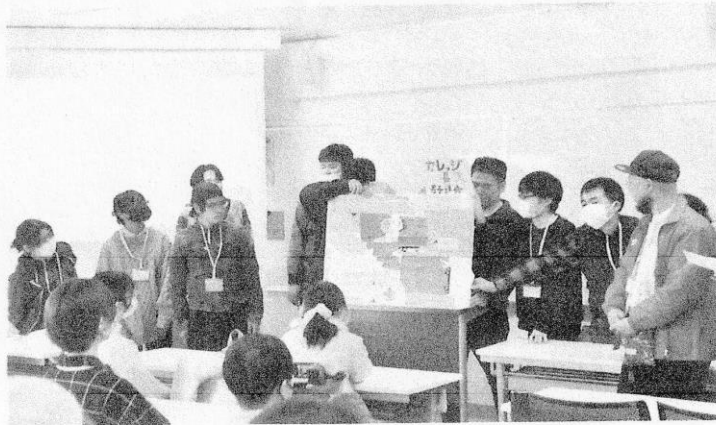
◆ 場 所: 長野大学 2号館306教室 対面形式

この件に関するお問い合わせ先

特任教授 宮本秀樹 電話: 0268-39-0001(代) E-mail: hideki-miyamoto@nagano.ac.jp

障がい者の学び直しの場「カレッジ長大」 9人が受講、サポーターと作品制作や成果発表

上田の
長野大学



成果発表を行う受講者と学生スタッフ

上田市下之郷の長野大学は10月から今月中旬、文部科学省から受託した事業で、障がいのある人の学び直しの場となるオープンカレッジ「カレッジ長大」を初めて開いた。学校を卒業した、10代から40代の軽度の知的障がい者9人が受講した。

「出会いや触れ合い、共同制作などで心が一つに」

今年度の同省「学校卒業後における障がい者の学びの支援推進事業」の委託事業の採択を受けて実施。同大におけるテーマは「STEM教育の要素を取り入れた障がい者の学び直し(Reskillin>gモデルづくり)」。STEMAMのうちA(アート)に重点を置いた障がい者版STEMAM教育と、将来的にはインクルーシブ教育とトビキングさせる「障がい者のための生涯学習」を柱に、障がい者の学び直しモデルを構築

することが目的。対象は学校を卒業した軽度の知的障がい者。学習プログラムは、障がい者の生活を豊かにし、新しい人間関係を作っていくことを目指して計画。スポーツや演劇、受講者の得意な生き方を旨とした学習成果発表などを実施した。

実施体制は、同大教職員に加え上田市役所や上小園地域の社会福祉関係団体でつくる連携協議会、コーディネーター、課外活動として参加した社会福祉学部を中心とした学生スタッフ18人。学生は、各受講者を担当する9人の個別サポーター、記録係や統括係などをつとめ、事業の核となる8回と7回の講義を、受講者はサポーターと共に「私」を主語として自身を紹介するポード作品を制作。文章やあいさつ、絵や折り紙など、それぞれの表現で作品を完成させた。また、男性受講者チーム、女性受講者チーム、学生チームとしてもポード制作し、カレッジ長大を振り返る感想や意見などをまとめた作品を作った。

最終日の8回目の講義では成果発表会があり、サポーターと共同で作品発表を行った。その後、修了式があり、小林淳一学長が修了証書を授与した。受講者は「様々な出会いがあり、共同制作などで心が一つになっていった。昼食でもシェア予定」と話した。

「楽しかった」「また開いて」「ここに来れば仲間が」 障害者学び直し 長野大で修了式



長野大(上田市)が障害者や性格を養育。切り絵が得意な男性は版面デザイナーなどをかたどった作品を展示。6歳果発表会と修了式が同日であった。受講者9人は、10月から8回にわたるワットサルや演劇、自己表現に挑戦。「憧れの大学にいられて楽しかった」「また開いてほしい」など振り返った。

の相談に乗る姿勢にサポーターは、各自が絵や文章を書いたハネルを使い、自分の趣味や性格を表現。切り絵が得意な男性は版面デザイナーなどをかたどった作品を展示。6歳果発表会と修了式が同日であった。受講者9人は、10月から8回にわたるワットサルや演劇、自己表現に挑戦。「憧れの大学にいられて楽しかった」「また開いてほしい」など振り返った。

6. 学生スタッフの座談会

学生スタッフの座談会（1月18日）

～カレッジ長大にかかる振り返りとして～

【2024. 1. 23 大学 HP】

2023. 12. 17 の成果発表会、2024. 1. 15 学生スタッフの打ち上げ会（任意）、そして2024. 1. 18 に学生スタッフによる振り返りのための座談会を実施しました。



小川コーディネーター、三村コーディネーターの進行により、「カレッジ長大に参加してみたの感想」「障害者の生涯学習にかかる社会的意義」「プログラムを実施しての気づき、改善点」などについて意見交換を行いました。本意見交換の内容については、その一部を成果報告書の中で取り上げること

となっています。また、座談会の記録に関しては、聴覚障害のある学生への情報保障としてノートテイクを行っている学内サークルの協力がありました。

以下、同座談会の一部、再現とまとめです。

◎コーディネーター：①～⑥の質問、Q1～5 ●学生スタッフ：A1～26

① カレッジ長大に参加してどうでしたか？

A1：最後の発表の中で自分らしさを表現してほしいと思いました。自分らしさを表現することは、その人らしさにつながるし、その中で成長したことも質になって出せるかなと思いました。その辺は意識して受講者のためになれるようにサポーターとして頑張りました。

Q2：意図をもって受講者さんと関わってこられたようですが、それは最初から意識していましたか？どうしてそういうふう意識しようと思いましたか？

A2：何か目標を作ってやった方が、個人的には一番その力が入るかなと思いました。

A3：参加して一番思うことは、繋がりが広がっていくような感じを強く思いました。

回を重ねるごとに、家族の方達と繋がることができ、受講生同士と学生同士、あとコーディネーターさん達との繋がりがどんどん強くなっていったように感じました。

Q3：支援の場に行く時に繋がりを作るためにどういうことに意識したいと思いますか？

A4：情報共有っていうことはどの場面でも必要だと思います。他職種だったり、他学年だったりってところでいろいろな人との情報共有をしていければいいかなって思っています。

A5：活動に参加して思ったことは、話してみないと、その人がどのような人か分からないということです。話した方が絶対いいなと思いました。後半は自分を意識していろんな人と関わったので、とても良かったなと思いました。

Q4：学べたことがたくさんあったとありましたが、特に印象に残っていることを教えてください。

A6：偏見があることについて（※偏見の肯定という意味ではありません）、偏見で終わっては駄目だなと思います。知ろうとすることが大事だなと思いました。

A7：こういうことが苦手ですとか、こういうことに気をつけなきゃいけないっていうのを事前の学習で知りました。どのように接すればいいのか、傷つけないかな、嫌な思い出で終わってしまわないかっていうのがとても不安でした。受講者さんに関わる中で、表現がよいかどうかは分かりませんが、気にして接しているよりも普通に接することがどんどん出来るようになっていったのは、自分の中で大きい変化でした。もっと最初から積極的に接していればよかったかなと思いました。最終的には（受講者との関わりについて）怖さってというのはほぼゼロに近いぐらいになりました。

Q5：今後いろいろな方たちと関わる時にどういうことを意識していこうと思いますか？

A8：自分の中で固定概念を絶対持てはいけないと思っています。実際に関わってみると事前の資料と全然違うところがありました。資料の中だけでその人の像を作り上げない方がよいと思いました。まずは、関わってみる気持ちが大事だと思います。

A9：受講者の方の成長として、それまで人前では発表出来なかったのに、最後の成果発表会の時は、自分で声を出してみんなの前で発表出来るようになったということを考えると、その受講者の方の居心地が良い環境が整えられれば、皆の前で発表出来るようになる可能性があるのだなっていうのを感じました。

A10：障害の有無に関わらず、他の人の意見を聞いたときに、肯定的に共感するとか、笑顔で接するとか、これは普通に日常的に当たり前のことなのかなと思いました。このようなリアクションを返せば、一つの経験として、緊張する必要が無くなるのかなあ知ったのは大きなことだったなと思います。

A11：カレッジ長大が始まる前に事前に面談しました。その時にお母さんから、人前で話すことについてあんまり得意じゃないとか、やったことないって言われました。最後のパネルの発表の時に、その大勢の人来るけど大丈夫？って言ったら、自分でやるって言ってくれました。今までよりも、ちょっとはつきり喋ったので、すごいと思いましたし、いい時間だったのかなって思いました。

A12：コミュニケーション能力の高さにちょっとびっくりしました。障害を持っている人に対して心のどこかで助けないといけない部分があるのだろうなっていう認識で接したところがあります。しかし私がいなくても問題ないという場面が多々ありました。そういう場面を見ると、その人らしさが出ている部分であり、いいなって思いました。

A13：私は社会福祉を専攻していないので、(社会福祉に関する)そもそもの知識量が違う。周りの人の行動や言葉を参考にしました。私はサポート係でしたが、支援の質が落ちないように意識してやりました。

[ポイント] その人らしさ， つながり， 実際的な関わり
環境整備， 共感， 笑顔， 先入観

②それぞれ役割がありましたが、役割の中で心がけたこと、工夫したこと、あとどのような点で困ったか教えてください。

A14：とりあえず近い人誰でもいいので、近くに来た受講生に話しかけようと思いました。具体的な内容じゃなくても、挨拶とか、何かその人に絡むような言葉を発しました。柔ら

かい空気になるかなと思って。イエーイだけでも言うようにしました。

A15: 受講者さんとじゃれ合うって言い方が正しいか分かんないですけど、ふざけ合ったりし始めた時に、私は一応見守るだけっていうことにしました。学生スタッフ同士のふりかえりの時間に、別の受講者さんからそのふざけ合っているのを見聞きして、何か不安に思われた方がいらっしまったようです。

A16: じゃれ合いの中で笑っている声に対して自分のことを笑っているじゃないかって受講者さんに言われました。私はその時どのように説明したらいいだろうかと正直思いました。あなたのことを笑っている訳ではないですと説明しましたが、そのことが中々理解してもらえませんでした。サポーター係として、どこまでその人の経験とか気持ちに踏み込んでよいのだろうかと考えました。

[ポイント] とりあえず話しかける, 説明の仕方

② カレッジ長大の参加の前後で障害者のイメージはどのように変わりましたか？

A17: 障害を持っている方は、家と事業所の往復が多いのかな、居場所の構築が必要なのかなっていうイメージを持っていました。私がサポート担当した受講者の方は自分で作品を作って販売していました。その作品を他の学生にも渡していました。最後の私編の発表では、インスタグラムとか YouTube を頑張りたいとおっしゃっていました。発信する力みたいなのをとても持っていて、ネットの中でも居場所があるっていうことをとても感じました。そのことは事前のイメージと現実とのギャップに関する驚きでした。

[ポイント] 事前のイメージと実際とのギャップ

④ 皆さん最初の質問の時に成長したって仰ってたんですけど、それを具体的にどういふことかっていう所を聞かせていただきたいです。

A18: 受講者とは特別な接し方でなくていいということを知れた部分が成長だと思います。

A19: 新しい活動に対するその恐怖心というか、壁みたいなものに関して前よりはハードルが下がりました。今ちょっと新しいことを始めようとしているので、そういう面で自分の

気持ちの持ち方が変わったなって思いました。

[ポイント] 普通に接すること, 新しいことへの挑戦

⑤障害者の生涯学習に関する社会的な意義は何だと思えますか?今回カレッジ長大のように大学でそれを行う意味というのは何だと思えますか?

A20: 大学を知って大学を楽しむために手がけていることがよくなって。

A21: 大学でやる意味としては、普段出来ない学びをする場所があるっていう所が、意味として一つあるんじゃないかなって思いました。

A22: このような事業を通じて障害者が社会の中で、普通に生きていけるようになるってことがあると考えています。障害者が社会に対して関わり続けるためにはこの事業は必要だと思います。あえてそれを大学でやるっていうことの意味としては、障害者の皆さんも学生側も、自分自身の変わったところや学びがあったことが挙げられると思います。

A23: 受講者自身が、こんなことも出来るのだっていう自覚を持つことによって、事業所以外でもいろいろなとこにチャレンジするきっかけになるのかなってというのが一つの社会的な意義だと思います。大学でやる意味っていうのは、大学に学生がいることだと思っています。そこで学んだ学生が今度社会に出ていった時に、障害者支援について理解の深い支援者がいるっていう環境を作る土台になるって思います。

A24: 障害者の生涯学習の社会的意義は、障害のある方の出来ることが増えることや、可能性を広げることに関連して、今ある差別とか偏見が無くなることも一つかなと思います。

[ポイント] 大学の開放, ノーマライゼーション (普通に生きること)

変われること・学び続けること, 差別・偏見への取り組み

⑥知的障害者のために社会はどうあるべきだと思えますか?

A25: 障害者の方には選択肢が少ないっていう現状があります。選択肢の問題については、伝え続けられないといけないと思います。(障害者自身が)いろいろな可能性に気づくとか、経験を重ねるといことは必要だと思います。社会全体であらゆる業界で、障害者に関わっ

ていくことが必要だと思います。また、障害者の現状などについて、他の業界に向けて発信していくことも必要かなと思います。

A26: その人に合った支援みたいなのができる、社会的な孤立を防いでいく公平な支援を行うというのが、大事なのかなって思います。

[ポイント] 選択, 社会全体での取り組み

7. 受講者の家族、事業所ソーシャルワーカーの声

(1) 家族の声

【カレッジ長大を受講して～家族の感想～】

今回、長大カレッジに、夫がお世話になりました。夫は、43歳。初めての子育てを経験しながら、更に積極的に新たな取り組みをするようになっていきます。

スポーツや演劇のワークショップでは、「僕は体を動かすのは好きではないけど、これはこれでいいよね」と。そして、1歳の子供も一緒に参加させて頂きましたが、受講者の方も、学生さんも可愛がってくれて、一緒の時間を過ごさせて頂き、とても有り難かったです。教室での授業では、夫「たくさん人がいて疲れたねー」、私「しかも、慣れている人じゃないしねー」、夫「そうだねー」と。でも、「こーゆーのもいいよね」と。

最後の成果発表も、とっても良かったです。夫は、病気を発症し、障がいを持ったとき、1ヶ月は全く話しができず、右半身が全く動かなかったので、その頃を思い出し、サポーターの方が書いてくれた紙を見ながらですが、「こんなに人前で、文字を目で追い、そこまでまごつかずに読むことができるんだ!」と。感動しました。そして、学生さんが、先生にツッコミを入れている雰囲気はまた私としては好きです。

今回のプログラムでは、学生の皆さんにそれぞれ役割があったと発表で知りました。すごく良いことだと思いました。

長大カレッジが終わりに近づいた頃、「ところで、なんで長大カレッジに参加しようと思ったの?」と聞いたら、夫「今の大学生ってどうなのかなーって思って」。私

「どうだった?」。夫「一緒だね、僕の頃と。ただ、コロナで色々あるけど」と。夫の感想を聞いて、感想って、みんなそれぞれで面白いなーと思いました。そして、それぞれにいろいろな思いがあっただけいなーとも思いました。長大カレッジの目的としているところとは違うかもしれないけれど。

最後になりますが、今回の初めての取り組みであるカレッジ長大に参加させて頂き、本当に有り難く、感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

【文責 受講者の妻】

【「カレッジ長大」について～家族としてのメッセージ～】

私の息子には軽度の知的障害があり、養護学校高等部を卒業後は就労の一択しかありませんでした。他の子のように進学したりして多くの仲間を作り、色々な事をさせてあげられないなあと思っていました。

就労先の方にカレッジ長大のお話を頂き、最初は一体何をするのかわかりませんでした。息子が同年代の学生の方と出会えるチャンスが来たと思い参加させて頂きました。

初めのうちは緊張していたと思いますが、プログラムの息子には苦手意識がなく毎回自分から進んで参加していましたし、帰宅後は何をしてきたのかほぼ毎回話してくれました。息子のサポートをしてくださった学生の方とも意気投合したようでプライベートの話もしたそうで楽しんでいました。成果発表会に私が参加できると聞いた時に照れて嫌がるかなあと思いましたが、息子から一緒に行こうと言ってくれました。きっとカレッジ長大でやってきたこと、出会った仲間、サポーターの方全てを見てもらいたかったのかもしれない。

実際にカレッジ長大での成果を見させて頂き、どの受講生さんも楽しそうで見ている私も嬉しくなりました。多くの受講生がまたカレッジ長大を開いて欲しいと言っているのを聞き、みんな本当に楽しかったんだなあと思うのと同時にこういう機会を作させて頂き感謝しかありません。また学生の方にとっても身近に障害者がいなければ普段の生活においてこんなに接する機会はなかったと思います。カレッジ長大は受講生

だけでなく学生の方にとっても良い学びの場になったのではないかと思います。

今回参加させて頂き息子はまた1つ成長出来たと思いますし、改めて今後も継続して頂けたら有難いなあと心から思いました。 【文責 受講者の母】

(2) 事業所ソーシャルワーカーの声

【ガレッジ長大について】

上小圏域基幹相談支援センター 金井菜月

受講者 A さんの担当をさせていただいております。

受講者 A さんは、養護学校卒業後、移行支援事業所へ通所していましたが、半年で通所できず家居になっていました。作業能力は高いものの、自分の思いを口にする苦手さや、他者との距離感がわからず、コミュニケーション面で大きな課題がある方でした。

今回ガレッジ長大に参加した理由が、昔から保育士になるのが夢で大学等で勉強したいという思いを持っていました。また、支援者としても年齢の近い人たちと関わることを通して人と関わることの暖かさや、社会参加することの楽しさを思い出して欲しいという思いで紹介させていただきました。

回数を重ねるうちに表情も明るくなっていき、自分の口で大きな声ではっきりと話をできるようになっていきました。本人から長大生さんたちがとても親切にしてくれること、一人ひとりに担当者がいて朝から待っていてくれることで安心して通うことができたと話してくれました。

終了式では堂々と母や支援者を含めた大勢の前で発表することができ、とても嬉しそうでした。また、修了証をもらえたことが一つ自信になった様子でした。

その後、自分から将来像を話してくれて、そのためにやりたいこと、これはできないことなどはっきりと話ができるようになりました。また、お金を稼ぐために働きたいこと、日中活動をしたいことの気持ちが出てきて、次のステップに進んでおります。

参加させていただいたことであきらめていた大学生になることへの夢を叶えたことや、

学生さんたちと関わりや学習したことから自分自身のことがわかり自信になり、気持ちが前向きになりました。

素敵な機会を与えていただき本当にありがとうございました。

【学ぶ力は無限大∞ ～「カレッジ長大」に参加して思うこと～】

社会福祉法人縦の木福祉会

相談支援事業所とらいあんぐる 向井名都子

「長野大学で学べる???」。誘いを受けた私は、話を聞きながらワクワクし、数名の利用者さんの顔を頭に浮かべていました。「長野大学???」。私からの電話を受けた利用者さんのお母さんも同じ反応です。「大学で学べるなんてできるんだ!色々経験をさせたいね。連絡ありがとう」。

楽しいことが大好きなダウン症のSさんと長野大学が繋がった瞬間です。

どこにいても学べる環境を整備し、共生社会の推進を目的とした文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」の一環であるカレッジ長大。長野大学での初めての取り組みで、準備に1年かかったと伺いました。仕事柄「共生社会」という言葉をよく耳にし、私も色々な方にお伝えする機会があります。共生社会は、地域を共に「創造」していく社会だと言います。まさに、この「カレッジ長大」がそうであると感じました。

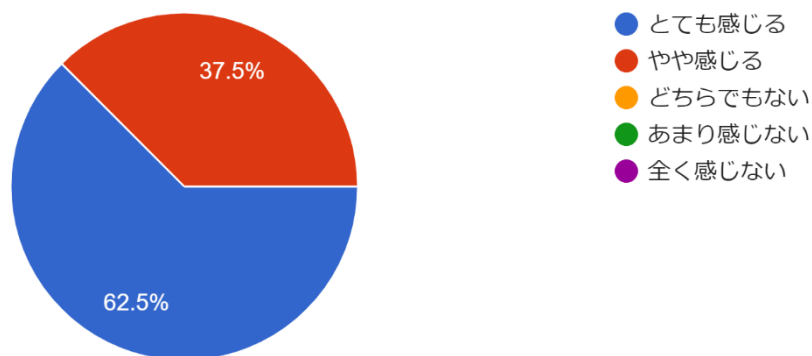
最終日の修了式に参加した時、そこには、この取り組みにご尽力された宮本秀樹先生と、「支える学生さん」「受講生の障がいの方」という関係を超えて、「相互に支え合う」姿がありました。ご家族や関係者も、みんなキラキラした目をし、笑いあり、温かさに包まれていました。この講座をみんなでやり遂げた自信と充実感が表情に溢れ、学生さんと受講生の皆さんから、「ぜひ来年もお願いします!」とラブコール。次につながった瞬間です。

講座が終了してからも、Sさんはカレッジ長大のことを話されます。非日常であった「大

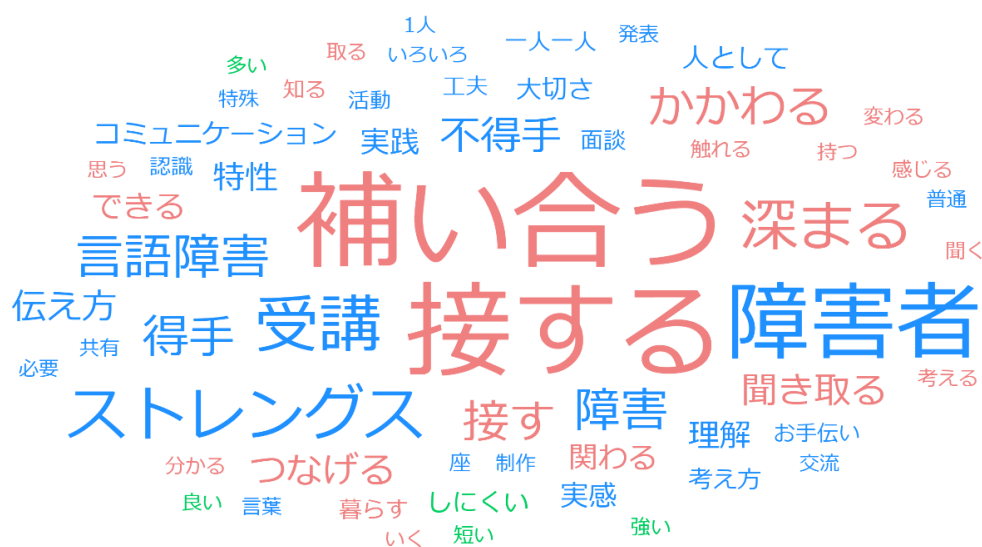
【回答】

- ・ ボランティア論で紹介があり楽しそうと思ったから。
- ・ ボランティア論で教えてもらった。
- ・ ボランティア論の講義で募集があり、関心を持ったため。
- ・ ボランティア論とその活動。
- ・ ボランティアの募集があったから。自分がやったことのない分野のボランティアだったから。
- ・ ボランティア情報で見て、自分の中でいい経験になると思ったから。
- ・ ゼミの先生から勧められ、良い経験になると思ったから。
- ・ 全学年選択講義「ボランティア論とその活動」で宮本先生に紹介いただいたから。
- ・ 障害者に関わるボランティアに参加してみたいと思ったから。
- ・ 障害を持っている人と接してみたかったから。また、ボランティア活動の1つとして経験してみたかったため。
- ・ 障害者に関わることに興味を持っていたことと、様々なボランティアに参加し、自分の視野を広げたいと考えていたから。
- ・ 精神保健福祉士の原理の講義の際に片山先生から説明を受け、「障害を持っている」という前提で交流する経験を積み、相違点や注意点を学びたいと思った。
- ・ 障がいをもった方への支援に関心があったため。
- ・ ボランティア論の授業で紹介があり、障害者に関わる機会が少なかつたため、挑戦してみようと思ったから。
- ・ ボランティアの内容が面白そうだったから。大学でできそう。
- ・ 障害支援の分野に興味があったから。卒論として取り上げたいと思ったから。

2-1. この活動に参加に参加して障害者への理解が深まりましたか



2-2. 上記の回答の理由について、具体的に記載してください



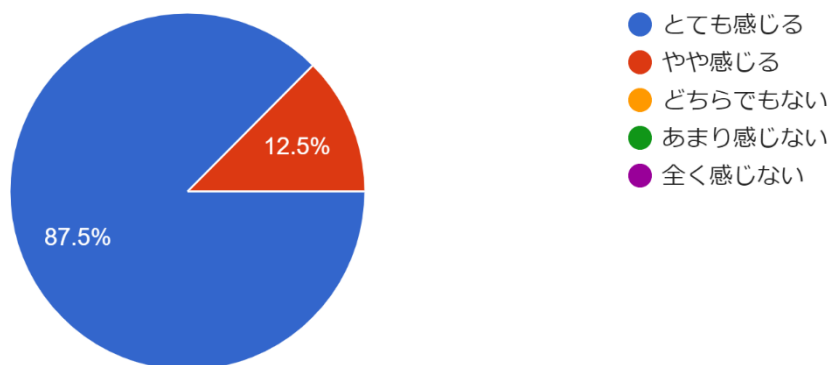
【回答】

- ・ 仲良くかかわることでみんな普通の人だなと思うことができたから。
- ・ ただ話を聞くのと、実際に関わるのでは全く自分の考え方や感覚が違いました。
- ・ コミュニケーションの取り方や伝え方などの工夫は必要だが、人として接するという点で変わりはないことを実感できた。
- ・ 短い時間ではあったが、いろいろな時間を共有できたから。
- ・ 実際に接してみて、自分が勝手に考えていたことが多いと分かったから。
- ・ 障害特性など関わらず、一人ひとりのストレングスを実際にみて、聴くことができたから。
- ・ 約2ヶ月間受講者のみなさんと関わり、それぞれの感じ方や考え方に触れることが

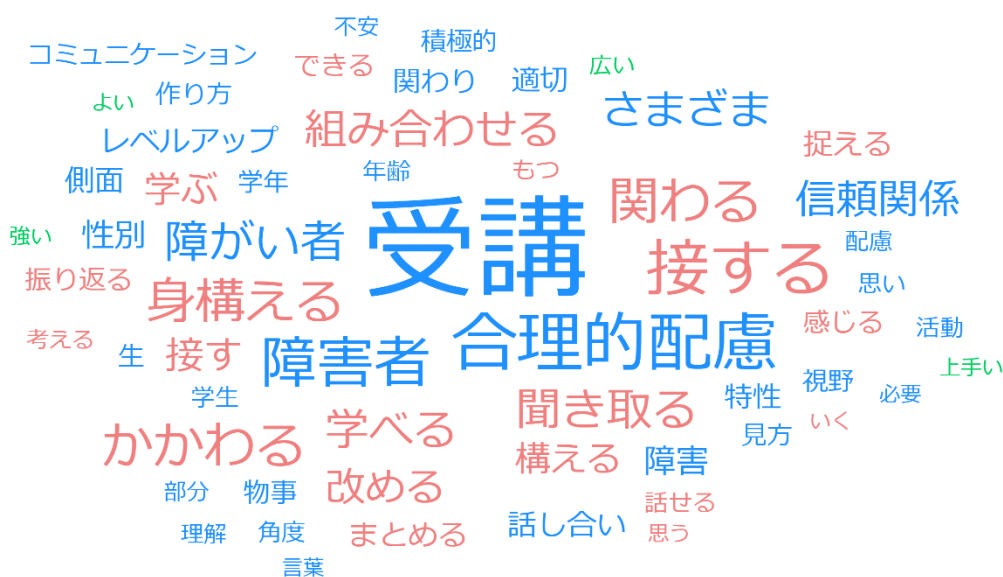
できたから。

- ・ 障害者の方も学生スタッフもコミュニケーションの取り方は同じだった。障害者は特殊な存在ではなくて普通の人間であることを再認識した。
- ・ 障害者との交流経験がゼロだったが、この活動を通して理解が深まった。しかし、よく理解できたとは言えないため、3を選んだ。
- ・ 最初は座学を通じて知識として理解しただけでなく、実際に接してみて実践的に障害者の特性を知ることが出来たため。
- ・ 障害者を良く知らなかったときに感じていた恐怖がなくなり、障害を前よりは少し実践の中で知ることができたことで、一人の人として受講者さんと接することができるようになったから。一方でまだまだ分からない部分があるとも感じ、知りたいと思っていることから100%理解はできていないと思う。
- ・ 障害者には「何かができない人」というようなイメージが社会には未だにあるが、得手不得手がただハッキリしているだけという認識が、活動を通してより深まったため。意見を聞き取っていく中で、本人も言葉にしにくい思いと一緒に考えて言葉にしていく作業の大切さも実感したため。
- ・ 接する上で、苦手なことのお手伝いが必要なことはあるけれどそれ以外は何も特別なことなどないと実感したため。
- ・ 「障害を持っている」という前提があり、担当受講者の発表や事前面談のとき、言語障害があると聞いていたため、不安と緊張が強かったが、基本的には私達と変わりのない1人であることに関し実感を持って理解できた。できること・できないことを理解したうえで、補い合いながら発表制作につなげることができた。
- ・ 障害を持たれていてもそうでなくても、同じ1人の人間である、と理解できた。
- ・ 実際に参加してみないとわからないことばかりで、障害をもつ方とのかかわり方や、その方と家族の暮らし方、その方の興味があることなどを理解することができたから。

3-1. この活動に参加して自身が成長したと感じますか



3-2. 上記の回答の理由について、具体的に記載してください

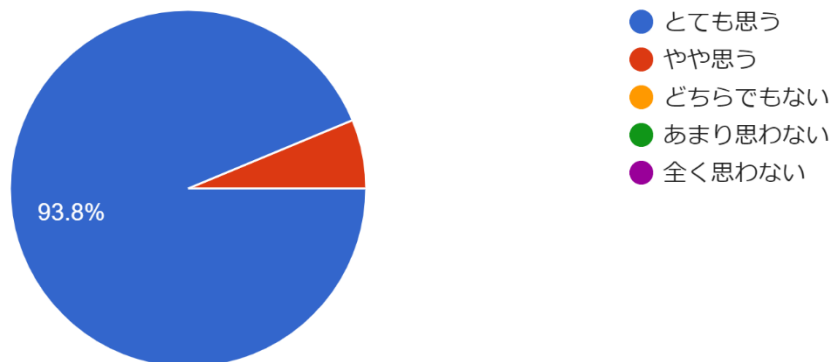


【回答】

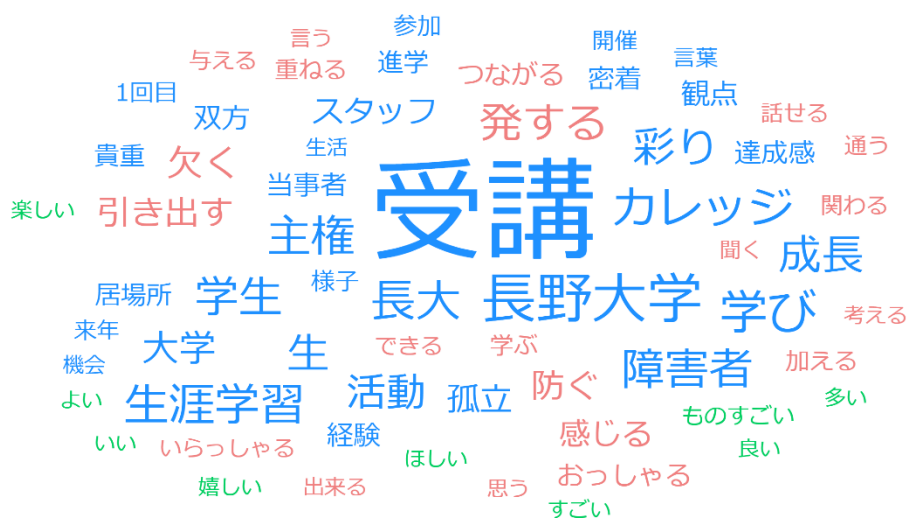
- ・ 仲良くなれるようになった。
- ・ 関わり方や、自分がもつ能力をレベルアップさせる機会になったと思う。
- ・ 実際に障がい者と関わる上でどのような合理的配慮が必要か学ぶことができた。
- ・ 障害者に対する考え方、障害とは何かをいろいろな側面から考えることができたから。
- ・ 受講生の方に自分から話しかけられるようになった。
- ・ 色々な人（性別、年齢など）に自分から話しに行けるようになったから。
- ・ 受講生や他の学生と関わっていく中で、物事の新たな見方や捉え方を知ることができたから。
- ・ 障害者の理解、適切な声かけのやり方、信頼関係の作り方などを学べた。

- ・ 障害者とのかかわり方を考えながら活動し、どうかかわればよいかが分かったため。
- ・ 緊張しないで相手と接することができるようになった。また、日常的な会話を昼の時間を中心に上手く展開できるようになったと考える。
- ・ 最初は自分から受講者さんと関わることに抵抗が少しあったが、最後には受講者さん全員と接することができたから。
- ・ 私が受講者の思いを聞いて「こういうことですか？」と言葉でまとめることで話し合いを進めていくことが多々あった。しかし、それが受講生の本当の思いであるのかという不安があった。言葉でまとめる力は強化されたと感じたが、聞き取り方や意見の振り返りなどもう少し改めるべきところがあると感じたため。
- ・ これまでコミュニケーションをとるのに不安があったが、この活動を通して、年齢、性別関係なくさまざまな人と話せるようになったと感じるため。
- ・ 障害者との関わりに対して身構えている部分が強かったが、思ったよりも構える必要がないと感じた。普通の人と同じような接し方とその人の特性に配慮した部分を組み合わせていくことが重要であると学んだ。
- ・ 視野が広がった。
- ・ 障害をもつ方を様々な角度から理解できるよう、学年を超えて学生スタッフと積極的に関わるすることができたから。

4-1. この活動は、大学として継続したほうがよいと考えますか



4-2. 上記の回答の理由について、具体的に記載してください

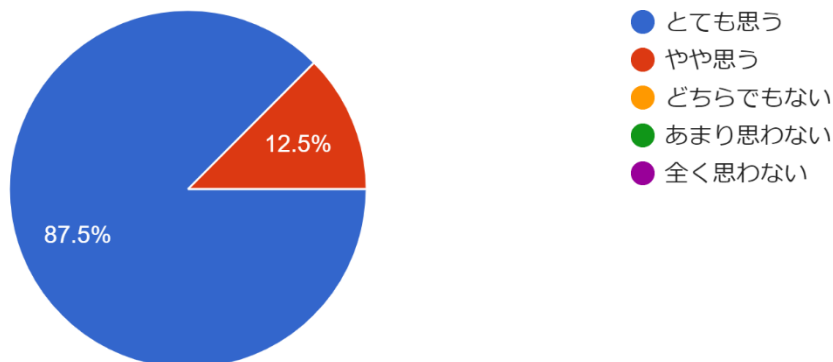


【回答】

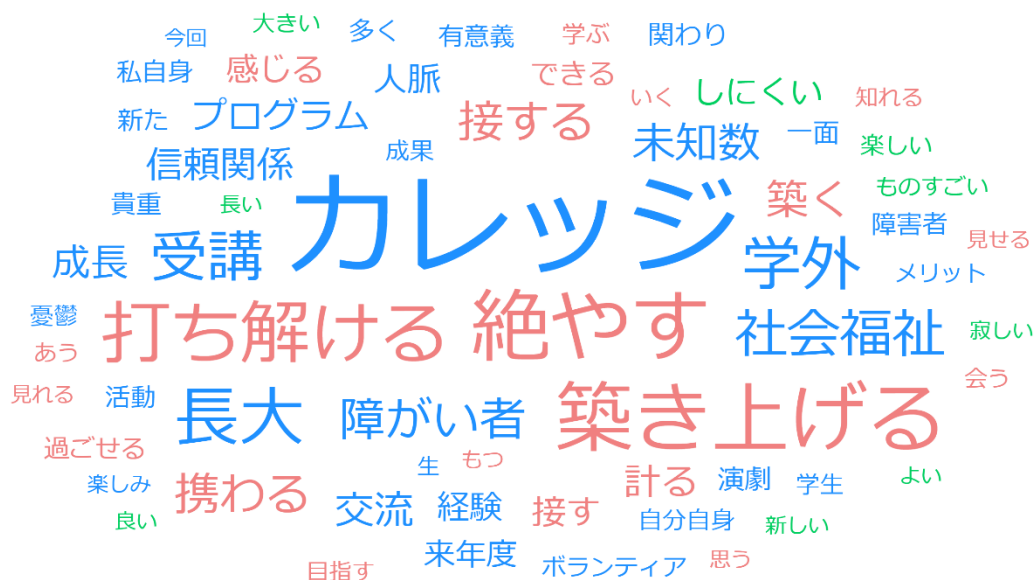
- ・ 参加者全員にとって貴重な経験になるため。
- ・ 自分たちもやりたいし、やりたいと言ってくれたのがすごく嬉しかった。
- ・ 受講者から継続希望もあり、受講者だけでなく、学生スタッフも成長を感じられたから。
- ・ 学生、受講者、双方にとって学びの機会となったから。
- ・ 受講生もスタッフも充実した活動だと感じたから。
- ・ 受講生も、学生も楽しく活動できたから。みんな来年会ったらやりたいと言っていたから。素敵な学びの居場所になっていたから。
- ・ 受講生の方が回を重ねるごとに、成長していく様子が見られたから。学生も成長できたから。

- ・ 現状として、障害者が大学に進学出来ていない状況がある。また、「来年もやってほしい」とおっしゃっている受講者の方が多くいらっしゃる。当事者主権の観点から開催すべきである。また、1回目には言葉を話せなかった方が最後の回で言葉を発することが出来ていた。成長のためにも来年開催したほうがよいと思った。
- ・ カレッジ長大は、学生スタッフと受講生のどちらにもいい影響(経験が増える、前向きになれる、達成感を感じられるなど)を与えていると思うから。
- ・ 大学が地域と密着しながら孤立を防ぐ交流の場として欠かせないものだと感じたため。大学生にとっても、貴重な経験になると思ったため。
- ・ 障害者の生涯学習という目的がとても大切なんだということが活動を通して受講生の皆さんの様子を見て感じたから。また、学生の成長にもつながるから。
- ・ 受講生の思いを聞く中で、「こういう活動をもっとやってほしい」「また参加したい」という言葉を聞くことが多かった。長野大学での活動をきっかけに、ほかの場所でも「こういった活動があるからやってみるのはどうか」というような思考を引き出すことができるのではないかと考えたため。
- ・ とても良い経験になるし、楽しかったため。
- ・ 障害者であることが理由で大学に通うことができない人々が、大学がどのようなものであるか知り、大学の学びについて体験することが、その後のその方の生活に彩りを加えることができると考える。
- ・ 大学生生活していてもなかなか障害のある方と関わる機会はないし、受講者さんには大学の雰囲気を感じてもらえるし、参加した学生自身ものすごく成長できるので。
- ・ 今回参加した学生スタッフや受講生の多くがまた参加したい、もっと学びたいという意見をもっていたから。

5-1. この活動が続く場合、また参加を希望しますか



5-2. 上記の回答の理由について、具体的に記載してください

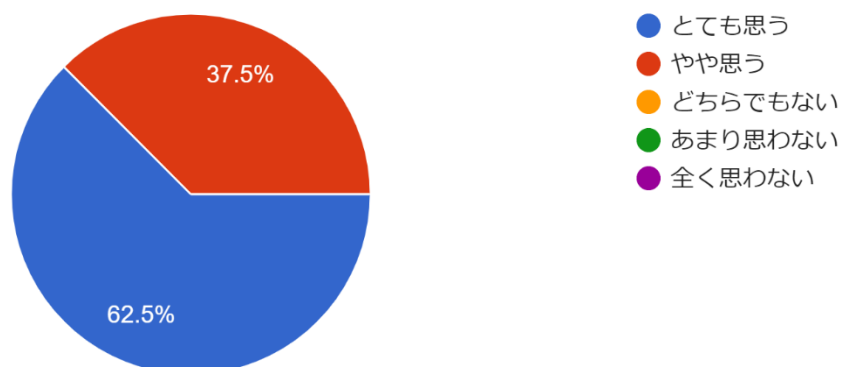


【回答】

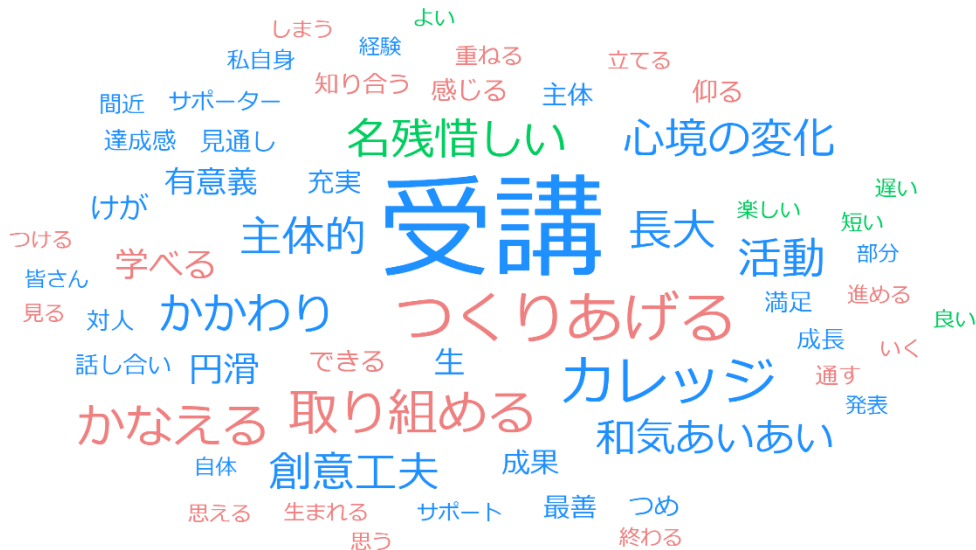
- ・ とても楽しく貴重な経験になるため。
- ・ またみんなに会いたい！！
- ・ カレッジ長大を通して多くのことを学び、障がい者の方と信頼関係を築く経験ができ、来年度以降も同じように携わりたいと考えた。
- ・ このようにいろいろな要素をもつプログラムは、とても未知数でありメリットは計り知れないから。
- ・ 新たな人との繋がりができて、自分が大きく成長できたと感じたから。
- ・ みんなとの関わりをここで終わるのは寂しいから。また新しい出会いも楽しみだから。

- ・ 今回の活動を通して、自分の人生において重要な経験となったから。日程があえばまた参加したい。
- ・ 今回の活動で築き上げた人脈を絶やさないため、楽しかったから。
- ・ このボランティアを通して自分も成長することができ、良い経験をする事ができたと思うから。
- ・ 社会福祉士を目指す私にとって、障害者と接する貴重な機会として非常に有意義な時間を過ごせたと思うため。
- ・ 成果発表で感じた感動が忘れられないから。また、もっと自分自身として成長したい、ここなら成長できると感じたから。
- ・ 演劇やスポーツのプログラムの際に、普段生活する中では交流しにくい学外の人たちと交流ができ、私自身も楽しいと感じたし、学生では提供できない部分で受講生の人たちの新たな一面を見られて、よい経験ができたと感じたため。
- ・ 楽しかったし、さらに多くの人と交流していきたいと思うため。
- ・ 初めは「長いな」「憂鬱」「不安」という感情が大きかったが、受講者の方と接していき、互いに打ち解けていく中で、「楽しい」「また会いたい」「次はどんな顔を見せてくれるかな」と、楽しみに変わっていったため。
- ・ ものすごく勉強になった!!
- ・ カレッジ生も学生スタッフもお互いに成長できる活動だと感じたから。
- ・

6-1. この活動は全体的に満足できるものでしたか



6-2. 上記の回答の理由について、具体的に記載してください



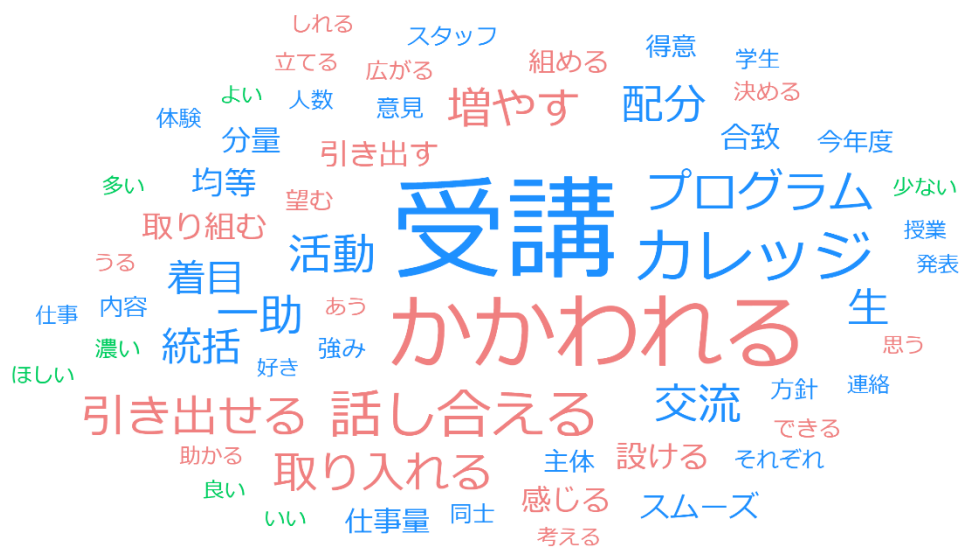
【回答】

- ・ 終わるのが名残惜しいくらいに楽しいと思えたから。
- ・ 大号泣するほどカレッジ生に貢献できた。
- ・ 成果発表会のあとに達成感を得られ、受講者の方も楽しかったと仰っていた。
- ・ いろいろな人と知り合う機会になり、人の輪が生まれたから。
- ・ 毎回とても楽しくて、充実した活動であったと感じたから。
- ・ 受講生が主体的に取り組めたと思うから。
- ・ もう少し話し合いを重ねたかった部分も多少見られたが、受講者とサポーター係などとのやり取りを通して良いものをつくりあげることができていたと感じるから。
- ・ 対人の経験を身につけられた、楽しかったから。
- ・ 満足できるものだったが、まだまだ内容は充実させることができると思う。
- ・ 活動自体には満足のいくものになったと思うが、自分の行動が受講者にとって最善なものを常に選択できたか不安があるため。
- ・ 成果発表で受講生の皆さんの成長を感じたことや心境の変化を間近で見たことでとても満足できた。しかし、期間が短かったこともあって受講生の皆さんの希望をかなえられなかった部分があったり、つめ詰めでなってしまったところもあり、そこを改善できればもっと良い活動になると思うから。
- ・ 普段できない活動、経験ばかりで受講生の方々との交流以外にも、多くの体験がで

きたため。また、受講者同士のかかわりの際にスタッフはどのようにサポートすればよいか、活動を円滑に進めるにはどうすればよいかなどの、創意工夫をしていくことで受講生にとって充実した活動にしていくとともに、私自身の思考能力も成長させることができたため、カレッジ長大での活動はとても有意義なものであった。

- ・ けがなどがなく、和気あいあいとした雰囲気ですサポートしたり、学べたりしたため。
- ・ 活動自体は受講者主体で有意義なものであったが、計画を立てるのが少し遅く、全体的な活動の見通しがもっと明確になっていた方が良かったと感じた。
- ・ 活動ごとに受講者さんの成長を隣で感じられてよかった。
- ・ 沢山の笑顔やコミュニケーションの場面を見ることができたため、とても満足している。

7-1. この活動の次年度へ向けた改善点を教えてください



【回答】

- ・ 回数を増やしたり人数を増やしたり他の受講生とかかわれるプログラムを増やしたり。
- ・ もう少し早くから始めた方がいいです。
- ・ 第1回から、成果発表会の方針を決めて、筋立てて活動ができればいいと思う。
- ・ 特になし。
- ・ 仕事の配分が少ない人が多かったように感じる。サポーター係以外の仕事をもっと増

えれば良いと思った。

- ・ 学生スタッフ同士で内容についてもう少し話し合えたらよかった。
- ・ もう少し内容を共有しあって臨むことができれば、さらに良いものになると感じる。
- ・ 連絡をもう少しスムーズにすることで、研修を確実に出来るようにしてほしい。
- ・ 仕事量に差がある。役割の人数配分(統括、受付は1人でいいかもしれない)、受講生同士の交流の機会を増やす、勉強系の活動(英語、大学の授業など)をしてみたいという意見も多かったように感じられるので午前だけなど限定して授業を行う内容を入れてもいいかもしれないと思った。
- ・ もう少し期間を設けて、各受講者のやりたいことをするプログラムを増やしても良いと思った。また、今回のプログラムの構成は先生主体で決めたが、今後は学生の意見も取り入れながらプログラムを考えるのも良いと思った。
- ・ 受講生の長期目標にももう少し着目して、企画などの希望を取り入れる。スタッフの仕事の分量をもう少し均等にする。
- ・ 受講生の強み(好きなこと、得意なこと)をもっと引き出せるような活動ができればよいと感じた。今年度の活動は「いろんな活動・体験をする」というようなイメージで、受講生の得意なことなどが活動と合致すれば濃い活動となりうる、というような感覚であった。様々な体験を通して受講者に新たな気づきや思いを感じてもらうとともに、受講生それぞれが好きなことに取り組み、それぞれの好きや得意を見ることが出来る場(発表形式でなくとも)があったら、受講者への興味関心をもっと引き出して、交流の一助とすることができるのではないかと考えた。
- ・ もう少ししっかりと1日の流れを組めると、スムーズにできる気がします。
- ・ 前もって全体的な計画案を具体的に立てておいてから活動を開始すべきであったと感じた。
- ・ 連絡を早めにしてもらえると助かります。
- ・ カレッジ生の声の中に、女性のカレッジ生とも交流したかったという意見があったため、男女関係なく交流できるような活動内容にできていたら交流の幅が広がるのではないかと感じた。

9. 編集後記 ～2023 年度事業から 2024 年度事業に向けて～

◎カレッジ長大でしか得られない受講生同士の関わり、学生とのコミュニケーションがあった。学生と受講生、お互いに多くの学びや成長を得られた。唯一無二の学習や経験ができる場を来年からも継続していくべきである。（森 隆之助/学生スタッフ統括）

◎成果報告会の受講生と学生スタッフの表情を見て、参加して良かったと感じました。そのくらい皆さんとても素敵な表情でした。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。来年度も参加出来ると嬉しいです。（小川 夏帆/コーディネーター）

◎連携協議会構成員として活動に参加し感じた成果と変化は、100%参加した当事者の意欲と楽しむ姿から、行動範囲と人間関係の広がりを感じました。そして、サポートをした学生からは、人を理解しようとする姿です。両者にとっての相乗効果は期待以上でした。（萱津 公子/連携協議会委員）

◎本事業は大学として大きな「挑戦」であったが、受講生・学生スタッフ・我々教職員すべての人にとって、予想以上の効果と成長の実感を与え、地域と共に歩む本学の新たな役割の一つとして、今後の継続を切に願います。（久保田 亜希子/教育支援担当）

◎ボランティアに参加した学生たちが「参加して良かった」「また参加したい」と感想を述べていたと聞きました。それは、宮本先生を中心に学生たちの意見に寄り添って運営された結果だと思えます。次年度も受講生や学生たちが長大カレッジを通じて成長していくことを期待しています。（池谷 道英/地域づくり総合センター）

◎はじめての企画に、参加者も学生も地域の支援者もご家族も胸を高鳴らせる出発でしたが、最後の参加者と学生たちの笑顔を見て、濃い3か月間の絆を感じました。「一期一会」参加者と携わる人々が新たな学びと成長を得た、その素晴らしい出会いを実感しました。（片山 優美子/教員）

令和5年度(2023年度)文部科学省委託事業

学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業

「大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築」

障害者版 STEAM 教育のプログラム開発を目指して
—自由になるための方法(リベラルアーツの「A」)を意識しながら—

2024年2月発行

令和5年度「カレッジ長大」教育プログラム開発事業



〒386-1298 長野県上田市下之郷 658-1

TEL 0268-39-0001(代)

https://www.nagano.ac.jp/education_research/collegeNagadai/



